

辨榮  
聖者

ひまわり

下

## 御慈悲のたより 下巻

### 一

仰の如く霖氣うつとうしく候折柄まことに氣持は快からぬものの、されども人の命を養ふべき苗などを長養させむとの 大みおやの聖寵のしからしむるものと存じ候へば、うちかえて辱くも感じられ候。さて今回は不思議なる御因縁に催されて幾ばくの日をかさねていと懇なるもてなしに預りしことの心つくしのほど深く感謝候。

大みおやの聖旨によりて本庄の里のきよき吾同胞衆にめぐりあふことを得たるはいかに嬉しく候ことにこそ。

就いては、きよき吾友よ躋しき我同胞よ、私どもは、大みおやの聖寵によらざればきよき信念は増長すること能はざるものなり。親によらずして子は成生すること能はず。乳にて養はるるは言はずもがな、這も立も皆家庭に親の教あればなり。靈てふきよき私共の心もまた

然り。如來てふ大みおやの恩寵によらずしていかできよき心が成長し得らるべきぞ。

きよき吾同胞のきみよ。私が常に大みおやの聖き乳に育まるる如くに、あなたもまた大みおやの聖き乳に養はれ玉へ。ナムアマミダ佛と、靈に渴かわきて鳴く聲の下に、大みおやの慈愛の乳房は與へられむ。私どもは 大みおやの聖き恵によらずしていかでか安きを得らるべきぞ。みおやの光を離れたる我らが胸の、日々二六時中いかにこゝろのはたらきをせるやをしらべ玉へ。おりに觸れては地獄の炎も胸のうちより燃出し、食ほり嫉みの餓鬼どもあらはれ、愚痴の畜生もともすれば胸に臥し轉び、高ぶりの修羅まげざらいの意氣地を張りこみ、たまたま人なみの心と成らざるにもあらざれども、そはただ表を装ふに過ぎず。かばかりに淺ましきわれわれも、まだ大みおやの光にあはぬむかしは、自ら覺るに由なかりしを、大みおやの心光に照らされてこそ、始めていと見ぐるしき我心とは信知すれ。此うば玉の心のやみも、大みおやの光に照らされ大めぐみに暖められて、日々の心の日ぐらしもかたじけなくも感じらるゝに至れり。

就ては、いかにせば大みおやの子を憐む御慈悲の御面に接することを得べきぞとなれば、

みおやの慈悲のふところの裡に在る身なれども、拜むことも出来ぬは、まだ私どもは赤子が母の面を見わかぬようなもの、大みおやの聖き乳をうけざれば、みおやを親しみ奉ること能はず。

大みおやの慈悲の面かけをこゝろにうつして忘れぬように心がくれば、いつしか心の眼にて、常に大みおやをこゝろに拜むことが出来うべく候。

就ては大みおやの御本身はとても凡夫の想像の及ぶ所ではなしと御經にも説き玉へり。應身の御すがたを心に離れず拜む思ひに成り候はゞ、その慈悲の面かけにみちびかれて、淨き御もとにいたることを得べしと。大みおやの慈悲の面影をうつして御送り申候間、常に眼に觸れ易き所にかけて、度々拜み居り候うちには、ついには心のうちに御慈悲のみおやを忘れぬように、また親しみ申上るる様に相成り申べく候。一枚は佐藤實様の御遺族のお方に御わかち下され度候。

皆様、共に共に、御信念のうちに慈悲のみおやの聖影をうつし置かれ候ように、御すすめ申上候。

三身即一の如來に悲しく感謝したてまつる。いかにとなれば、天則秩序を統攝し玉ふ實體の法身ありますが故に、現宇宙あり天あり地あり太陽あり月あり萬物あり人類あり國家あり統帥せる者あり社會あり彼あり我あり。すべての産出せられ保存せらるゝものあるは、之を保護する永恒自存の活けるものましませばなり。すべての活かさるゝものは之を活すべきものゝ力によらざるを得ず。活さるゝものは活すものを信ぜざるを得ず。

進んで報身如來を信ず。報身如來は智慧慈悲の光をもて、宇宙に充しめ玉ふてすべての心靈を開展し、惡質を解脱する性能であるから、深く敬尊す。いかにとなれば、吾人は法身によりて精神及肉の生命を與へられたるも、心靈開發して自己の伏能を完全に發達して眞理の生命に入るに非ざれば、肉の生命のみならば、眞の價値あるなし。報身は信ずる人の心靈を開き靈化し玉ふて、吾人に眞理の生命に入らしめ玉ふ。

若し天則理性の中に是の如きの萬物を靈化する理性なかりせば、釋尊及び聖善導聖法然の

如きの精神は、いかなる性能によつて靈化せられたるものぞ。これ靈の命を與ふ報身如來を信する故なり。

應身如來は全く唯一如來の性能が（釋尊の）個體に現じたるなり。彼のたくさんの言語よりは、彼が人格の全きを完徳の鑑と深く信伏す。

貴師よ、第二第三のは未だ恩恵を感じざるにもせよ、せめては其の身其の精神のその肉の命を與へ養ひつゝあるものに謝し玉へ。

曾て秀光法尼より御申越に相成候ことは生が深く希ふ所、十月初旬必ず出張候。

只願くは活ける如來の聖旨によりて、えらばれたる人々を復活せしめて、きよき命とはたらきとに成らしめんことを。

### 三

清き光に照され慈愛のあたゝかなる家庭の山中家の子女のきみたちまでに申す。

宗教は先づ安心を定むることが基礎であります。安心とは人生の主義と目的との確定する

ことであります。苟も人生に此安心未だ定まらざる人は盲目的生活と申します。最高等なる宗教心にて定むべき安心に三の條件あります。一、所求。二、所歸。三、去行との三つであります。初め所求とは人生の目的として要求する所であります。要求なしに信仰の立つわけはない。然らば何が人生の目的としての要求する所でありませうとなれば、先づ人は若し出來得るなれば永遠の生命（永恒に生き通しに成りたいこと）、常住の平和を得たきこと、圓滿なる人格に成り度きこと。云ひ換れば、いつまでも生き通ふしにして、いつもたのしき平和にて安心のできる身となりて、また一切の人にも愛敬せらるゝ圓滿なる人に成り度いと云ふのが所求と申します。斯やうな望みは理想の高き人ならば何人にも起る要求であります。然しながら斯やうな目的がいかにして達せられませう。此要求を満たすのは形の上ばかりでなく精神的に得らるゝのであります。此要求に満足を與へて下さるのが所歸の尊と申します。

二、所歸とは歸命信賴と申して、宇宙に唯獨りの尊き御方が在して、此の尊き御方にすべてを御任せ申して、精神的に人生の終局の目的を満足させていただくのであります。

然らば其の宇宙に唯一の大みおやと仰ぐべき御方はいかなる御方で在すでせう。そは我等凡夫には分りませぬ。故に釋迦如來が此世に出で玉ひて其眞理を教へ玉うたのであります。

宇宙間に一り絶待的に尊き御方を阿彌陀如來と號します。アミダとは、空間に十方世界を照して、一切の衆生の心靈を靈化し給ひて人格を完全にして下さる御方にて、また無量壽と申して、永恆に生き通うしの義は、御自らばかりでなく、一切の心靈を永恆に活き通しにして下さる御方と云ふ義であります。此如來は宇宙間に獨り尊きと共に、また一切衆生の大御親であります。

此如來が我等に與へて下さる御恵と御力は、恰も太陽の光（エネルギー）を以て此形體を活して下さる如くに、如來は私共に靈的無限の光を以て心靈を活かして、永遠の生命と圓滿なる人格とに爲して下さる御方であります。

我等が精神の奥底に伏せる心靈が、大なる無量光如來の光明にて開發靈化せられて、圓滿なる人格と爲り得られると云ふならば、然らばいかゞせば其要求する所を如來は與へて下さるのであります。是に於て第三去行（方法）を要するのであります。

第三、去行ニモツ(方法)。私共が永恒の生命と圓滿なる人格とが成就せんには、宇宙最尊の無量光如來を歸命信賴すべきのであります。そして如來の光明と衆生の信念との間に行はるゝ方法は念佛三昧であります。ナムとは私共がすべてを如來に任せて頼む意味にて、アミダ佛とは絶待無限の太陽なるアミダ如來のこと。我ら佛を念すれば如來の聖意に入り、如來の大なる聖意は我らが心に入り、大みおやの太靈心と我らの心靈の生命の通ふ所の精神を、言に現はして、ナムアミダ佛と云ふのであります。

精神的に大なる如來の慈悲と我らが念佛心と常に感應する所の方法を念佛と申します。我らは如來大み親の光明によりて靈に生きて益々向上する所の人生であります。我らが人生は靈に活きますく完全に圓滿なる人としていたゞくのであります。

如來の絶對無限の一大靈電が一切衆生の發燈器の裝置する所に靈光は現はれます。

此靈力は衆生を永遠に活す力にて、私共は大光明の中に、ますく向上的に生活してゆく所に、價値ある生命、光明の生活に入るのであります。

上來の要求と歸命の本尊(活ける本尊)と念佛とが確かに心に定つて、益々向上する心の

定つたのが安心決定したと云ふのであります。

願くは山中家の御家庭の中に大みおやの光明が照り渡りて麗き心の花はかぐはしく咲くやうに祈ります。

#### 四

君よ、現在君が執てをる職務をば眞に神聖なる物として大みおやが選みてさづけ玉ひし業として、悦んでつとめて居る哉。將た是も人間の活き役何か爲ねばならぬ故に此の職務を執つてをるに過ぎぬと思ひなされ玉ふ乎。私が是迄多くの教育家に就て其職務に對する心の置き方を窺ふに、宗教心のある方は前に屬し、信仰心の無き方は多くは後の方に屬しておる様に見えます。君の現に執つて居ますつとめは、他の金錢杯の物質のみを取り扱ふ業とは異にして、人間の最も貴重なる精神上の、ことに人格の基礎を造るべき教育の業務は、最も神聖なる職務にして、即ち天のみおやより君に選みて授け玉はりしことなれば、大みおやに感謝の意を以て悦び勇みて業に従事する時は、非常に大なる力を以て満足の念を以てつとむること

とができます。

君よ、夫にしてもそれは全く宗教心が充分に成じたる上のことにて候。然らばいかに宗教心を成就せんとなれば、宇宙間に獨り尊き大みおやの實在を信じて、其に歸命信順して、みおやの恩寵によりて自己の改造を祈ることにて候。元來人間の天然の我は煩惱の皮殻に覆はれて、如來の靈光を感受することができぬ。されば至心に念佛して、無始の業障消滅し、靈的光明を被むりて心靈が復活せば、如來との間に於て、如來よ、アナタは全く我御親にて我は全くアナタの御子であるとの自覺ができる。自覺と共に暖かなる慈悲に融化せられて眞に靈的に生きて來ます。

君よ、君が理想の人格標準となる人を紹介いたしますから、君はそれをきよき理想の勝れたる同胞として其方を模範として人格を形成し修養し玉へ。

君は佛教の中に種々の方面に多く現はれておる觀世音菩薩のいかなる聖者なるかを知り玉ふか。彼の菩薩は種々の方面から見られておるけれども、私どもの、彌陀を中心本尊とする如來光明主義より觀世音菩薩を見る時はかやうである。

彼の菩薩は宇宙唯一の尊き彌陀尊の法王子たると共に、また彌陀を尊信する諸の信仰家の代表的聖徒である。されば今君が如來の光明に依りて靈に復活し、常に彌陀の聖意を奉戴して、彌陀に献げたる心を以て、自己の職務を神聖とし、是みおやの使命として、勇み進みて潔よく仕ふる心にて世に立つ時は、即ち是觀世音の分身なると俱にいける觀世音である。

觀經にかやうに説いてある。若し誠に――彌陀を信念し彌陀の聖意の水に清められ心の花開きし者は即ち人間中の白蓮花である。蓮花は泥中より出でながら最も清淨皎潔にして麗はしき色と芳ばしき香とを呈しておる如くに、人は煩惱の泥中より聖き信仰心が咲き出づるは恰も泥中より出たる白蓮に比すべく、されば觀世音菩薩も勢至菩薩も其が爲めに勝友と爲りて其人を愛護し玉ふ、いかにとなばれ其人は既に彌陀の子と生れたる者なればなりと。

視玉へ、觀世音菩薩の尊像の寶冠に一の化佛を奉戴してあります即ち是れ大みおやなる彌陀尊なので、而して相好圓滿百福莊嚴を以て人格を飾り、胸に金銀瑠璃寶石等を以て瓔珞として嚴飾するは即ち智慧仁慈正義安忍剛毅謙遜貞操等の諸の道德にして是れ全く人格を莊嚴するの具である。然して有ゆる道德の根本は、即ち彌陀の心光を信奉し慈悲を愛樂憶念し聖

意の現はれを仰ぐ處のいとよき心である。

君、活ける觀世音よ。宇宙の心靈界に輝ける彌陀の光明によりて靈に復活し玉へ。活ける觀音として世に立ち玉へ。人生宇宙の主なる無量光の光明を以て自己の心光とし、みおやの使命を果さんが爲めに、献身的に最善の努力をする者はれいける觀世音なり。また觀音の分身なり。

視玉へ太陽はすべての生物を活かす處のエネルギーを放ちて止まぬ。

彌陀は靈光を普ねく衆生の心靈に滌ぎて靈的の活氣を與へ給ふて居る。

人は太陽の光を離れて活けることは不可能である如く、人の心靈は彌陀の光明を離れて活けることはできぬ。

彌陀の光明は人の心靈を永遠に活かす靈力である。其光明を被むりて本とうに有り難き信仰心が開くれば、即ち觀世音の白蓮のそれと同じく、麗はしき潔よき活きくした心と爲る。其信心の花開くが故に天の獨り尊き大みおやを信することができる。こなたからみおやを信樂するが故にみおやはこなたを深く愛護し玉ふ。彼の青蓮の如き清らかなる慈悲の眸は

我等が上に注ぎ玉ひ。いとあたゝかなる慈悲に抱擁せらるゝ我等は眞に靈福を感じてくる。彼の海より廣きみむねが通うてをるから、永しへに法悦と妙樂と平和とにくらさるゝのみならず、大なる無限の泉源より流れ來る靈力を加被せらるゝが故に、日々の仕事の上に勇みと力を得てつとめらるる。

彌陀の光明に觸れて、本とうに活き／＼して、朝日のかゝやく如く夕日のまばゆき如く、我心のうちに赫々として、永しへに活躍し得らるゝは是不可思議の業によりてなり。

## 五

如來三身一體のこと。

一、法身。宇宙萬物の本體にして、一切萬物はこの法身より生じ之によつて保存せらる。我らの心も身もすべてはこれを離れたるものにあらず。

二、報身。智慧と慈悲とを以て、われらをひきうけて、この世にては光明にて愛護し、後にはきよきみ國に攝取したまふ。

三、應身。人間に教ゆるために八相成佛して衆生を度したまふ釋尊なり。

## 六

如來の御めぐみをうくるにつきて解脫ゲツ靈化といふ二の義あり。解脫とは如來の御めぐみによりて衆生の心にある垢質をのぞきさるはたらき、靈化とはきよくしてうるはしきよき心に化成するはたらきであります。

元來人間の心には佛性とてよき性と、煩惱のあしき素質と兩方はりて、その煩惱を俗に氣質とも申して、そは丁度米にぬかのあるようなものにして、その氣質に、神經質もあり、また氣の短きも、長きも、氣のはやきも、物を苦にする、腹をたつ、ねたむ、にくむ、うらむ、あまり無貪着、また貪着しすぎるなど、そは、さまざまにして十人は十人各別である。それらはみな聖經の中の三垢といふことにおさまりてある。その心の垢質をのぞき去るのには、如來の光明より他に道がありません。聖經に此光にあふものは三垢消滅し身も意も柔轉にして善心生ずと説き玉ひし。

いかゞしてこの光にあふことが出来ませうと云はば、至心に、不斷に、如來の御慈悲の相好光明に意を注いで、一心に念じあげて、ねてもさめても念をかけて、而して心に念（言）して、如來よ、あなたの尊き御ぼしめしを私の心のうちにあたへ玉へと。自身のわるき心をば如來にさゝげてしまひ、あなたのきよきみころをわたくしに與へ玉へと。如來現にこゝにましますと信じて、行住坐臥に祈念するときは、漸々にあなた（如來）のきよき思召が自己の心に感じられて、氣質のわるき質はいつしかのけて、きよき心に化するなれ。是まつたく自身の力にてはなく、如來のたまものなれば、たゞく如來の御めぐみの光をあたへ玉へのみ念す。

如來のためには衆生は可愛き子にてあれば、必ずみおやの如來は子のためにいかなる慈悲をもたまふなれば、疑はず慮らず、一心に御慈悲をうくることにのみ心をかけなされ。如來は其氣質をのぞきさりて、いかなることにも恐るゝことなき大丈夫の心と化して下さることうたがひなし。

## 七

## 往生

往はかわるとよみ、生はうまる。すなはち生れ更（かわ）りのことなり。

往生は生れ更（かわ）りと申しますれば、生れ更りに二種あり。一には精神の生れ更り、

一には身體の生れ更り。

こゝろの更生と云は、人の生れつきの心は私わがまゝにてよきものでなく、物を苦し、いろいろの氣質のためにまどはされて、自身で自身をせめ、又人に對してもへだてがつきなどして、氣質のかどがありて圓滑に人ともゆかないのである。

それをば如來のおめぐみの光にてのぞき去りて、まことに平和なやすらかな心によみがへることができるのであるけれども、如來の大なる力をあてにせずして、自分は、かような生れつきの氣質であるからしかたがないと、自分からきめてしまふから、氣質がいつになりてものぞくことが出来なくて、一生はかなき日ぐらしをしますのであります。それを生れかわり

て、よきひぐらしにして下さるのが、如來の御めぐみの光であります。

人の生れつきの氣質といふものは、取りのぞくためについて居るのであるから、それを取つてよき生活させるのが如來の眞の思召であるから、まことに如來の御慈悲を信じて、心の生れ更りとなりて、此世から心だけは極樂のひぐらしに成りなされよ。

あみだ如來のいます所はどこでも極樂である。今あなたが自分の氣質をすてゝ一心に如來を念ずるときは、そのころのうちに如來はましますなり。心のうちに如來ましますれば、心のうちが直に極樂のおもひとなりて、かたじけなくよろこばしき日ぐらしが出来る。それを眞宗の開山上人は和讃に、超世の悲願きゝしより、我らは生死のぼんぶかは、有漏うろうの穢身えんはかはらねど、心は淨土にすみあそぶ。とは、すでに生れ更りし心の状態をのべられしのである。

如來の大みおやは特別に其御身を愛し玉ひて、はやくに心の生れ更りとして廣き大なる心として、いかなることにも恐ぢ恐るゝことなき平和なる極樂の心の日ぐらしさせようと、深くおぼしめしのあるにもかゝはらず、あなたが自身と氣質を大事にしてすてかねてこそ、

自分と其御身をまなやめて居らつしやるではありませぬか。

一そう思ひきつて、いまゝでの心をころしてしまつて、如來の大なる御めぐみの中なるころ即ち如來の御ころによりて、生れかわりなされませ。

そうなりし時より、もはや身はこゝにありながら、極樂の聖衆しょうじゆのかずに成りしのであります。

それをあなたは、からだが死なぬうちは、心の生れかわりはできぬものとして、自身からきめて置したために、さつぱりと心の生れかわりが出来ませぬのであります。

如來のおぼしめしに任せて、心の生れ更りとなりて、身はこゝにありながら、ぼさつの中に加はりてみれば、それからはなすことすることみな極樂のぼさつの仕ごと々なるので、一生補所の願にかなふ仕事となるのであります。其ほうがよほど徳ではありませぬか。

心が生れかわりて、御めぐみの中によろこばしくらさるゝ時には、自づと身體もすこやかになり氣も丈夫になりてゆくことは必然であります。

一つ思ひきつて御やりなされ。きつと如來があなたの心を生れ更りにして下さること疑あ

りませぬ。

而してこの世にありて、はや極樂のつとめをする時は、此身體の生れ更りによりて、まさしく淨土に生れし時には、此世にてつとめしだけ、位が上へ進むのであります。此世界にて一日一夜のつとめは極樂へ往いて百歳の功をつもるにもすぐれたりと、大經に説き玉ひしにありませぬか。

とまれ、一心にみだ如來に御まかせ申上なされ。

## 八

如來の大なるめぐみによりて、聖きに清きにきよめられし吾同胞なる鈴木辨教尼きみよ。先きつ頃はあなたの御照介によりてよき吾同胞とかたりあふことを得たるはまことに悦ばしき處、我は吾大みおやなる如來の聖旨による處として深く感謝し奉れり。

さて此頃の御寒さにかに御くらしなされ玉ふ哉。見眞大師が北越の雪を凌ぎての御教化中、寒くとも袖につまむ西の風、みだの國より吹とおもへば。

たとへ寒風肌をつらぬくさむさにも、よりはあつき信念だにあらば、之は物のかずかはとおもはるゝならん。然れとも○に熱誠なる信念はまことに得がたきことに候。只々日々御慈悲の光の中によろこびつゝ感謝のつとめをすることをこそねがはしけれ。

御母さまにも宣敷願候。

## 九

## 歡喜光

明けぬればけふもうれしやよろこびの 光のなかにすむとおもへば  
たとふべきものやあるらめよろこびの 光にあへるこのうれしさに  
憂といふうき世のやみも明けぬべし このみひかりのてらす前には  
なにはがたよしあしともにかりこめて たゞみめぐみのほどをよろこべ  
天地にみつよろこびのみひかりは 照りわたりてや春ののどけさ  
よろこびの光のほどをしるときは ねてもさめてもうれしかりけり

其後御無音多謝候。昨年は願應寺さまへ上堂できませぬで御無禮仕候。愚納十日當寺へ來り明日美濃の國富秋てふ處へゆき、また四五日にして當寺へ來りしばらく當寺に滞在候。御都合によりて願應寺さまへあがりても宣敷候、御同寺さまの御都合次第にて。余拜眉申上候。

一〇

衆生佛を憶念し奉つらば佛もまた衆生を憶念し玉ふ。彼此の三業相捨離せざるが故に親縁と名づく。煩惱深重なる我ら、一心一向に如來を憶念し奉るときは、此無明罪惡のこゝろも如來大慈悲の光明に照らされて、この心の闇も晴れて、いつくしみの御懷の中に春風貽蕩、天に歡び地に喜ばしく、有りがたしといはんか、よろこばしとのべんか、たゞ感謝の聖名の外なく候。

さて昨日は中村氏よりの御傳言承はり候。ついでには新一月廿九日より三日間塩川願應寺様に昇堂することに仕るべく愚納より御同寺さまに申上候。余御面晤に申上候。

## 一一

如來のみめぐみによりて、いかなるばあいにも、うるはしき色をかへざることを持ち奉  
つる。

如來の靈やどりませるひとの心は即ちいけるくわんぜをんなり。聖きみむねによりて煩惱  
のほのほもいつしかうせて、いさぎよきことたきつせのごとくなれ。(註―瀧見觀音さまの繪に)

## 一一

のちの世のくるしきことをおもへかし　なになげくらんかりのやどりを

うきことのかさなる身こそうれしけれ　世をいとふべきたよりとおもへば

教育のうた (註―古歌)

かわゆくば五つをしへて三つほめて　二つしかりてよき人にせよ

一三

あみだ佛眞金色にして圓光徹照して端正無比なるを念へ。

相好圓滿にして、背相無し。(うしろをみせたまはず)

十方より來る人、皆面に對す。(おもてむけたまふ)

一四

圓光大師

あみだ佛にそむる心の色にいでば 秋のこすゑのたぐひならまし

徳本行者

末なりの我らごときは食てのんで あみだほとけとねたりをきたり

圓光大師

あみだ佛と心を西にうつせみの もぬけはてたる聲ぞすゞしき

## 一五

## 勢至楞嚴章

我本因地、(われもとむかしはじめて發心)

以<sub>二</sub>念佛心<sub>一</sub>、

入<sub>二</sub>無生忍<sub>一</sub>、(さとりをさとる)

今於<sub>二</sub>此界<sub>一</sub>、攝<sub>二</sub>念佛人<sub>一</sub>、(はじめ自身のさとりを得たることはわすれがたければ、人にも同じみちをしめす)

歸<sub>二</sub>於淨土<sub>一</sub>、

勢至菩薩過去久遠劫。無量光佛より超日月光佛に至るまで十二光佛の末の佛にあひたてまつりてより、常に佛を憶念してわすれず、子の親をおもふごとくにしてしばらくもわすれず、終に無生忍を得たりと。

我はたゞいつかほとけにあふひ草 心のつまにかけぬ日ぞなき

宗教は實に人生一大事にて候。誠に、眞劍に道を求むるにあらざれば佛教の眞光明を發見し難く候。さればこそ幾千の學問を修むるか或は一室に閉籠りむつかしき修行せざれば成ぜぬと云事も候。

只正眞にすなをに善知識の教に隨ひて至誠心に修め候はば、必ず新らしき宗教の光明を發見いたし申べく候。然らば宗教とはいかなる眞理を教ゆるものにて候哉となれば、宗教の宗と云ふは宗（たつとき）と云意味にて、即宇宙には絶對的に尊き唯一の神尊在ます斯神尊は唯一にして無二無三、此尊き唯一の神尊を信じて一切を獻げて仕へ奉る教を宗教とは申候。然らば宇宙間に在ます唯一の尊格を釋尊はいかなる靈名を以て其神尊を號け玉ふかとなれば、經に無量壽佛威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと能はざる處なりと。誠に此如來は有ゆる神また佛の中に於て本師本佛にしていかなる神も及ぶものなし。而して唯一の神尊なれども其絶對的に大なる御働を表はす爲に十二の御名を以て其御聖徳を示して在ます。

然らば其尊き如來を信じ候はばいか成大利を得べく候哉との御問には、私共の生得具有て生れたる心の垢汚がきよめられて清き心に生れ更り申候。こゝが宗教の一大事の關門にて候。

若し如來の光明被むりて信心開發すれば、此身の上にはかはりしこと無之候へども、心の奥底に最靈なる光明の照すありて、心は廣くゆたかにして常に法悦の樂みを感じ申候。かくの如きの心の状態に相成候ことを光明生活と申候。あなたは物故し玉ひし亡夫君の御菩提の爲にも、いざ是より一心に聖き光明の道を求め候へ。あなたが自から如來の光明を精神に被むりて光明の中の人と成り候て、冥土に在ます亡き君を、あなたの心に受けつゝある光明の中に御誘引いたし候へ。是御亡夫君に對し最も仕え奉つる道にて候。實に宗教は人生の一大事にて候。縱令一百歳の壽を保つとも如來光明の中の人とならざれば闇より闇に入るべき外之れなく候。此光明を獲得候上は、今世も光明中に清き生活を遂げ、而して壽終の時は光明永しへに輝つゝあるみおやの御膝下に還ることに候。

先日あなたと御同行の御婦人はあなたの御知己にて候哉。實に御兩者共に宗教に入り候は

ゞ有望と信じ申候。若し御兩君共に光明の道を修め候はゞいかに美しき御心の生活に入る事ならんと存候。

あなたの如き心の金剛石を具有し乍ら、之を空しく光輝を放つこと能はずして、光陰をいたづらに只形の事のみにつかふて果る事はいかに遺憾な事に候哉。かく得難き寶石を空しく埋没して了ふは惜しき極に候。願くば御兩君共にく此聖き光明の道を求め光輝ある生たるべきやうに敢て御進め申候。

あなたよりも宣敷御傳相成候て共に道を修め玉はんことを御すゝめ申候。

一七

あなたの御手紙によれば、自己は罪惡である、己を捨て、絶對的服従でなければ救済は得られぬとの信仰と、また一方積極的に自己を飽くまでに發揮すべき教育とは、常に内心の衝突に少からぬ煩悶をなされるとの事。考ふるに佛教に人の精神に對する二方面の信仰の内、消極的方面のみの宗教教育を受けたのが、自然とあなたの御心を惱すのであると存じます。

就ては釋尊も太子たりし時物質上には尊きこと天子の位、富四海を保つべき又榮耀と榮花とは上なき位置に在ませども、この物質上の幸福は高尚なる理想を以て靈的にうえたる太子の精神を満足させることはできぬ。太子は肉の幸福を與ふる如きの物は實に還つて苦と空と無常と無我とにして、之を食るが如きは己を惡魔の網に囚はれる様な感じをする故に、毫もそれらを幸福とは思はれなかつた。そこで太子は奮然と起つて、王位を破れくつの如くに棄捐して山に入つて道を學び、勤苦六年十二月八日の曉に、無明生死の夢醒て初めて發見したる新天地の中に大安樂と自由とを得なされた。宮中の物質上の幸福は還つて太子の精神上の煩悶の器となり、後に乞食道士の物質上に一鉢の貯なき沙門の精神には無上の光榮と無比の幸福とを感じり。大宇宙に充滿せる無盡の靈福は悉く我有にて、内心の満足は眞に無上の靈福を感じ玉へり。釋尊の宗教的信念の内容の消息を洩し玉へる、無量壽經の序説に於て、正しく我等衆生の信仰心の積極方面は斯くあれかしとて模範を示し玉へり。

釋尊が彌陀三昧に入玉ふた爾時に、釋尊の精神世界は我等が肉眼に見るべき天地とは全く異にして、絶對無限の靈界の清淨眞天に、無量光如來は赫々たる太陽として無量の相好光明

普く法界を照らし玉ふ。其彌陀の光明が反映せる釋尊の相好は譬へば太陽が満月に反映する如くなり。經に爾時に世尊諸根悅豫し姿色清淨にして光顔巍巍たること明淨なる鏡の影が表裏に暢るが如く、黄金の色身萬徳圓滿の相麗はしく、御血色は殊に清らかに玲瓏玉の如く、光顔は巍巍として威神極りなきは、是れさながら彌陀の光明に反映せる釋尊の御すがたなり。

かくの如く模範を示し玉へる釋尊の教に隨うて、彌陀の光明に依て復活する時はいかん。我等の無明と染汚と苦惱と罪惡とは、是彌陀の光明によりて脱却せらるべき消極的方面にて、清淨と歡喜と智慧と不斷とに靈化し玉ふは積極的方面なり。

彌陀の光明は實に是人の精神をして現在を通じて永遠に活す靈力なり。現在より精神的に眞の幸福と光榮とを與へ而してすべての活動に無限の力を與へ玉ふ靈徳なり。凡そ有ゆる宗教中に無量壽經中に現はれたる釋尊の御身に示されたる宗教心の模範ほど積極的に活々したるものは他に無いと思ふ。

諸君よ、あなたの御頭の中臺の玉座に在ます靈性は本大みおやの王子に在ませども、未だ

幼にして全身心を征服し統禦する權威を得玉はざるなり。されば宇宙の大みおやの光明を被むりて、幼君をして即位せしめて、全身心を統率してみおやの光明の下に自己の使命を果すべく、無限の力を與へらるゝやうに常に聖名を稱へて祈り玉へ。

## 一八

歡喜光裡に新年を迎へ無量壽の靈名を稱へて壽ほぎ奉つり候。寒風肌にさむき夜もあたゝかなる大みおやの慈悲のふところにすむこゝろよさ。

其のちは如何に在らせられ居候哉。今日はよき御天氣とおもへばまた翌日は風が吹き出で、風が靜かに成たりとすればまた曇となり雨となる、ほんとうにうるさき世と云はどいふものゝ、其中に娑婆の變化きはまりなき趣があるのである。此世の中に生存するほどは、この心配が漸くかたづいたと思へば、またつぎに一の心をつかわねばならぬ事わき出で來る。ほんとうにいつに成りたならば、何のこゝろがゝりも無き眞にのどかなる心の春に成るであらうと、大かたのひとは思ふのであらうけれども、それは風も雨も曇も暑さ寒さもなき一年

中をのぞむやうなもので無理な要求である。風も雨もあつささむさも、みな常の天地の働として〇んければならぬので、只人間の都合や勝手のために天地は働きなして居るのではない故に、自分の方から天地の氣にかなふやうにして行かなくてはならぬと存じ候。此の世間を娑婆と云ふのは、娑婆とは梵語にて譯すれば勘忍土。勘忍土とは此世界自然にも、又人間同士の間にも、相互にいか成ることに、堪へこらへ、どう云ふ事にも忍ばねばならぬ世界と云ふのである。いかなる憂き艱難にあうても、それを勇ましく大丈夫に戦ひて打ち勝つ力を以て忍ぶのが強忍と云ふので、どのやうな事に對しても、甘き物をたべるやうに安んじて忍ぶのを安忍といふのである。けれどもそれは並み／＼の人には叶はぬことで、實に絶對的に偉らい力あるものゝたすけによつて、いかなることに偉い／＼慈悲と御力とによりて非常な力を加へていたとき、たすけてもろうて光明の日ぐらしを得らるゝのが即ち念佛者の精神生活である。

願くは大慈悲光明中に安き御日ぐらしあらん事を望候。

あみだぶと一つ心をたねとして 同じはちすに實をばむすばん  
小夜ふけて南無々々となふ子の聲は 親の心にかにこたえむ

## 一九

承はれば長時間に渡りて全力を注ぎ爲されて折角に積累したる要塞を一朝の砲撃に破壊せられしは如何にも遺憾千萬實に同情に耐えず候。併しながら失敗は成功の基、其の經驗に鑑み益鞏固なる降魔の策を施し爲されん事を希上候。

御書中に身體の健否は精神に及ぼし精神は身體を支配すと云ふ事に疑を生ずと云云。實に御尤に存じ候。

本より佛教に色卽是心、心卽是色とて、色とは物質卽ち身體の事にて、身體と精神とは不一不異の關係を以て居り、身體の故障は忽ち精神に及ぼし、身體がそのまゝ精神とまでも見做す事も有之候。然して精神の働き幼稚なる程精神が身體に屬する關係深く候。例へば人類以下の動物及び人類の幼年者の如きは身體の外に精神の働を認むること無き位にて候。而し

て頭腦の奥の底より高等なる理性が顯動するようになりて、精神が身體を支配するように相成候。尙進んで靈樞性が正しく顯動するに隨つて、彌心靈の勢力が強くなりて身體を支配する様に相成り候。普通凡夫は精神が身體に支配せられ、進み／＼て聖人と成る時は、精神力と格が非常に高等に相成る故に、精神の靈力益遠大になる故に身體のために精神が左右せられざることに相成り候。

兼ねて申演べ候通り、精神に天性（生理的）理性靈性と三階に分つ時は、天性的の精神は全くすべての動物の共通性にて、身體が其まゝ精神かと思はるゝ位なものにて候。

若し進みて靈性の充分發達したる聖人の如きは身體の爲めに精神を左右せらるゝことなきが如し。

ソクラテースが從容として毒を呑み、釋迦牟尼が六年苦行身體疲勞すれども精神は全く健全なる如く、宗教の旨とする處、靈性的精神に宇宙大なる大靈の力を被むりて、心靈の力なく自己の肉體を慰安し肉體を能く扶くるに至るも天性我は肉體の支障のために影響を被むること免れざる處なり。

願くは大靈の力を我靈の力として、宇宙と共に洪大なる心靈を發揮して、自己の身體を加護せんことをこそ願はしく候。

## 二〇

大みおやの慈しみを傳へん爲に此所彼所めぐりに、大に延引に相成候事慚愧に耐へず候。稍春和之候に相成候昨今、云何被爲居候哉御書翰によれば御病氣にも拘らず聖き道に益々御すゝみなされ候由隨喜に堪へず候。

五井の君よ。可憎病魔のために襲はれしは何とも同情に勝へず候へども、それでも貴重な光陰を悶の中に埋めてしまふようなことはせずにと還つて永遠に靈活すべき聖き道を求め、肉をかへりみず靈に活くべき眞理を捕獲することあれば、禍も變じて福となることにて候。世の人のおもふ幸福必ずしも眞の幸福ともならず候。たとへ健康にして百年のいのちを保つとも、たゞ徒らに肉の爲めにほだされて空しく過し候へば何の所詮かあるべきぞ。

如來は絶對無限の光明なれど、其光明を我が物として、如來とは本より親子にて候へば、

親のものは子のもの、親の無限の光明が即ち我心の光と相成候。しかれば如來と共に我が心も宇宙に周備してのこりなく候。

五井君よ、風雨にあらざる限りは人間の建てたせまい家屋より出で、而して大みおやのかぎりなき蒼天の青硝子の屋根の大きな住み家の中にて、大みおやより使はれし太陽の能力より出づるオゾンとそれから新らしきよき酸素の豊富なる空気をほしきがまゝに吸うて、而して人間界の方を見ずして大みおやのまします天つみそらにこゝろを逍遙して、こゝろは聖きみ國の人と相成り候はば、かへつてよろしき事と存じ候。實は愚納事明治三十三年頃ロクマクと肺炎とに患部を構ひ少しは咳血もいたし候。こゝろを大みおやにまかせ、こゝろを本にして養生いたし候。漸々恢復いたし今日の状態に相成り候。随分夜を日につぎて二人前ほどの仕事をいたしつゝつとめ居り候。是また自分の力ではなく大みおやの御恵に候。

願くは大みおやの慈光のなかに平和なる心の御ひぐらしのほどを祈上候。

承れば此頃の御からだの御容子春ごろにくらぶれば何ほどかは御快よきに向ふとの事大慶此事に候。いけば念佛の功つもり、死なば浄土にまゐりなむ、とても角ても此身には、おもひわずらふことぞなき、との宗祖の御語のように、此世に在りても光明中の住居なれば敢ていなむべくもあらず。さればとて、かぎりある世を強て留らむとおもふにもあらぬ身には、自づと御佛の思召にかなふもの故この身に持ち來りし丈は毫も残さずにつかうてゆく物とおもふ。敢て強ちになき命迄をもとゞまらむなど、おもふ人は、自分で自分の命を心から氣をもみころしてしまふのおもふ。佛まかせの安き心と成りぬれば自分を殺すようなことはない。今回が輪廻生死のまはりしまゐとおもへば、まづは大抵のことは忍びて、一日なりとも娑婆悲劇も充分に覽見するもまた一しほの興味あることにて候。實に此世界の大活動劇は神が物したる脚本かまたは衆生が作りて見たり見られたりかは知らねども、これほどの大舞臺にすみからすみまで喜劇も悲劇も悪漢も善人もいかなる處にも演出せざる處なきにいたつたのは外になく候。

楽しい悲しいもみな夢幻。此夢幻がまた一しほである。はげしくかわつてゆく處に趣味が

深いとおもふ。千變萬化變化のはげしいほどおもしろい味も多い。

### 三三

承はれば追々に御快方に向ひなされ候との事。

大みおやより大決心をなさしめむとの聖旨より、一度しやばの假の身の、何時替るべき日の來るにもあはてぬようとの深き思召の然りしことならんと存じ候へば、實に御親さまの至れる盡せる聖意は只々仰ぎて感謝するの外之なく候。

先帝の如く文明的の醫師はあらゆる手を盡しすべての術を施し奉つるも、また五六千萬の臣民等が佛に神に祈り奉るともいかんとも致しがたきは、大みおやの聖旨に背き奉ることならぬ。大みおやはいか成聖意によりて御引上げ遊ばされしかは人智の測知する處にあらず。維新以來吾國民は天皇陛下の外には大なるみおやの大權能を信ぜず、人間の力が宇宙を自由にするかのように妄計す。其國民のいと幼稚なる智恵淺き者をさとしめんが爲に大みおやより引上に相成り、人間はすべて天の大みおやの大權には信順すべきを示し玉ふとおもへ

ば、大みおやの慈悲のふかさは、たとへば、やそ教にて、天のみおやはすべてをあはれみ其愛を表はす爲に一りの子を犠牲にして罪ある衆生を救ふの道を示し玉ふ、とのごとく、大みおやは人間の智と力とは決して怙みに成るものならざることを我國民にしめし玉ふことならめと存候。吾國民は大に覺醒して天の道に信順すべき動機を與へられしも、いかんせん宗教家の其理を示し人民を救はんとするもの有なし、只心あるもの自ら信する外なし、貴姉も此先の命は全く大みおやの特寵より與へられしものと信じて光明の中の日ぐらしのほどを祈候。

## 二三

此頃御病容いかゞ在らせられ候哉。よしや御身御床のなかにもせよ、こゝろは彼のみだの淨土におもひをすましめ玉へよ。しかるに彼のくによそほひ、其寶の樹のさま、一切のものゝの寶を以て自然に合成し、無量の光り照す、微風ゆるく動きて諸の枝葉を吹くに無量の妙なる音聲をいだし、其音流布して諸佛の國に徧す、音を聞くものは深きさとりを得ると

かや。八功德池の水に心をすましぬれば、我心も自づと湛然としてすみたゞえ清くいさぎよく甘露を味ふごとくに感じらるべし。黄金の池に水晶の砂はかゞやけり、意を水にすましぬれば、調和冷煖にして自然に意にしたがひて、神を開き體を悦ばしめ、心垢を蕩除てきよく明らけく潔くして形なきがごとしとかや。我を忘れ身をわすれ神を淨土にすましぬればこゝもまた淨土にてぞありける。

## 二四

謹しみ惟みれば梅花發くを待つ冬の末つかたより御地に留まり梅が香をわづか名残にとどむるけふに至るまで幾回の日を重ねて何かと御心盡しの御もてなしに預り御厚意の程感謝いたへす候。

願くば此因縁を以て御全家御心を一にして益々佛の大道に進み人生一大事の因縁たる佛知見を開示し佛の正道に悟入せられむこと希望に勝えず候。寔に有爲遷流の世は、光陰馳せ行くこと須臾もとゞまらず。若したのみ難き明日を期して道業を修めむとすることあらば、一

生空しく過してついに得る處なく闇に入りて何の生にか光明に接することを得む。

古人云く、此身今生に向て度せずんば假令彌勒の下生を待つとも竟に解脱の時なしと。寔に人生一大事の因縁は、自己の靈性を開發し、大みおやに親近し、聖旨に隨順して、今身より永遠の生命を得るにあり。若し靈性開發する時は此處即ち是涅槃極樂界なり。何ぞ必しも此身の命終を待つて初めて淨土に生るゝことを要せむ。

大みおや慈悲の眸を注ぎて子等の信念を催し玉ふ。願くば冥想觀念して大みおやの聖意に合明せむことを希ふ。御好意に報ゆるに道業を勧め候こと斯の如くに御座候。

## 二五

蕭しみて白し候。先つ頃は八重九重に咲匂ひぬる櫻の花も散りはてて今年の春の名残りを告る今日此頃、物寥しく感ぜられ、また新緑のみどりを添へて樹々の梢にも

大みおやの御圖らひの程を感じられ、碧深き木の葉の色も嬉しげに有るよろづのなかに大みおやの恩寵のこもらぬくまもなく、是を見彼を聞くにもありがくてぞありける。

さて此程は、深く御配慮にあづかり、ありがたくぞんじ候。思ふに已に數年前よりの病氣を自ら知らずして今日に至りしものなれば、已後よく注意してあまり無理なる事をせざれば急激に進むこともないものならんと存候。毎日々々それでも如來様が御使ひ下さるには格別に差支なきことならんと存候。

されど御親切なる御注意を被むり有難く存候。爾後尙一層注意いたして養生する事に心懸け候。かたじけなく御禮申上候。

實は其病氣よりはもつとく容易ならぬ病氣の爲に常に頭を悩ましつゝ、いつ此病氣が何分なりとも快き方に向ふものならんと案じて止まぬ次第にて候。

昔教祖釋尊の御在世に維摩居士が重き枕に臥ける時に、釋尊が御心を悩ませ玉ひ、誰か居士の病氣を訪問せよと仰せられ玉ひしかども、誰も皆維摩居士を恐れて、私が訪問しませうと云ふものが一人もありませんでした。最後に文珠菩薩に仰せられて居士の病氣訪問と云ふことになりました。すると文珠菩薩が居士にたづねに成りました。居士よ、全體貴士が病氣の性質はいか成る病氣で御ざると問ひますと、居士は、實はわたくしの病氣は一切衆生の病

氣が私の病氣なので、衆生の心の病が治らぬ間は私の病氣の治りようはありませぬ。殊に殊に私の心にかゝる病氣と云ふのは、釋尊の御弟子の名前こそつけたれ實には精神的に本とうの御弟子となつて居らぬのである、いかにも其等弟子等の病氣を治してやらねばならぬと云ふ病氣の爲に、私の病氣はいよゝゝ重くなつたのであります。

今愚衲の病氣もこゝにあります。現に日本人は種々の事に酔うてしまつて、眞實に眞面目に人生を大みおやの聖意にかなふ様な生活をなさねばならぬと云ふ眞面目な人物は實に稀にして雨夜の星を見る様に感じられます。願はくば此日本の國民が宇宙の大いなるみおやを眞實にみおやと信じて、みおやの子であるとの自覺を以てみおやの聖意にかなふ人生となるやうにねがはしく、此衆生の病氣がもつとも愚衲の病氣にて寝てもさめても惱んで居る次第であります。たとへ全治には到らざるとも何分かは前途に光明を見まほしくて候。

尙此心の病氣につきても、一心に大みおやに一切衆生の病平癒を祈り申と共に、此からだの病氣につきても一層注意いたすべく候。

尙先日敏子様よりの書簡に對して御返事もいたさすつひにのびのびになりまことにすみ申

さす。願はくば大みおやの聖き御名を以てます／＼聖意に仕へ奉らんことを大みおやの聖き名を以て祈り奉候。

## 二六

時瀟殺たる風に野山の草木も凋れて何となく無常の觀は天地に充ち満てる頃ほひ、此頃光徳寺上人よりの御便りによれば御子息喜代司君には御丹誠の甲斐なく遂に永眠なされしとの事。先年はじめて知り初めてより求道の御志深く末頼母敷存候ひて、其後は東西隔りたりと雖云何在られ候哉と心にかゝりつゝありしところ、此度ついに其訃音に接する事になりしは今更の感にうたれ候。あゝ生者必滅は娑婆の習、老少不定は人界の掟とは思ひながらも實に驚嘆此事に候。ついてはむかし泉の式部がその息女小式部の内侍に先きだゝれし頃ほひ、悲しみのあまりに、「もろとも苦の下には朽ちずしてひとりうき目を見るぞ悲しき」との嘆きをおもひてあなたの御悲しみに何とも同情に耐へず候。然るに和泉式部はそが動機となりて性空上人の教化をうけ、後には念佛三昧の門に入り深くみだの慈悲に薰習し、口に稱ふる

所は彌陀の名號、意に念ずる處は如來の御慈悲、いつとなく染まる心は秋の梢の紅にいよいよ深きを増しぬる後には、斯は思ひしにや。

曾て佛教を學びしは歌をよむ材料を得むが爲位にて習ひし佛教なれば、すは一大事我息女に先きだれし時にのぞんで見れば、其佛教は我が深き慟哭の情をたすくるの力なく、娘の眼前の無常こそ眞實の佛法を求むるの媒となり、ついに活ける彌陀の慈悲に觸れて初めて生れ更りたる式部となつた其頃に、

夢の世に仇にはかなき身をしれと 教へて歸る子は佛なり

と眞の信仰が出来て立かへりて願れば我子こそは眞の善知識。若しも小式部が導びいてくれねば只だ佛教を歌の材料位にとどめて、全く自己を現在より永遠の生命に救ふべき眞理なるを知らずしてしまつたと思へば、娘は身を犠牲にして、我を眞實の佛法に導びきしものとすれば、をしへて歸る子は佛なりと感ぜざるを得ぬ次第ならんと思ひ候。五井夫人よ先立ちし喜代司君は眞實にあなたを導びきなさる善知識であります。

あなたの悲しさの深ければ深きほど、大みおやの如來さまの慈悲の御手に御すがりなさり

ませ。

あなたの慈悲の手より洩れたるをかなしびなさることく、大みおやの如來の御慈悲の御手を離れぬやうに稱名を稱へて、意には一ら如來の御慈悲にたよるやうに御すゝめ申上げます。

## 二七

人に生れたうれしさ。

人は萬物の靈（長）とて、よろづの生けるものゝ長たるもの。佛教にては六道の中に於て人の身をうけることは甚だかたきことゝ仰せられまして、何故に人は萬物の長で有りませう。衣食住の生活が他の動物よりもすぐれて居る故に靈長と申すのではありませぬ。人に生るればこそ、かしときみちをきゝ、かぎりなく救はるゝ身となることができるので、此身のまゝが靈長ではなけれども、み法を聞いてこれを信じ、上もなき佛位にものぼるべきことができるのは、人間に生れたうれしさである。

かく受けがたき人身を受けたるかひもなく、一生たしかなる安心もなく、いかなるみ法に依つてたすかるべきかも知らずして、かえつて我まゝの心にて、つみとがを作りて、三惡道のたねのみにして、無量萬さいの苦みをうけるとは、いかに愚かでありませう。うれしいのは、人間に生れて救の道にあふたのが、しんじつによろこばしいのです。

眞實の幸福は、

人は金銀財寶は藏にみち、位も尊くいか程の榮耀榮花にも何不足なく、また無病にして長壽をたもつとも、かりの幸福とは申しませうけれども、眞實の幸福とは申しませぬ。なぜならば榮耀もみな夢まぼろしのなかなれば、ついに消えはつべきものにして、生者必滅盛者必衰の天則はまぬかれがたきものなればなり。たとひ六親眷屬百千あるも會者定離とて會ふものはかならず別離すればなり。故にそれは眞實の福とは申しませぬ。然らば何か眞實の幸福でありませうとなれば、此の眞實無ろの妙なる法によりて安心を得、全く彌陀のめぐみに靈化せられたる精神なり。

人は眞實に彌陀の信心得たる上は、いかに困難の中にもよろこばれ、まづしきにも安んじ

られ、夢の世の中の不しあはせも精神には幸福を感じらるゝ。

精神に彌陀の靈光を受けたる身は、こゝろの中に靈福にみたされ、うれしきよろこばしき此の世をおくり、後の世は此上もなききよき樂しき國に生れる身とおもへば、今もうれし後もたのしく、人こそ知らね、まことの幸福にみたされるのである。

わたくしは衣は着たものばかり食は日々にうけるもののみなれども、こゝろは、天にも地にもいづこにも至る所に、如來さまは、たのしみとよろこびと幸とは常にあたえて下されたまふ。

このしんじつの幸福をわけてあげたいのがのぞみである。

## 二八

人ありて、何の爲に信心をするのであると問ふものあるに答えて、

信心の旨意は、このかぎりある身の爲にあらで、精神が如來のめぐみのひかりを受けて、此の世も、かんなんの中にも安らかに、なやみの中にも平和なるこゝろとなり、後には清ら

かなる都、阿彌陀如來のみもとにいたりて、ぼさつ聖衆に入りたく思ふまゝに、ひたすら、みだの恩寵を信じて、いかなることあるうとも、たといのちはとられても、このみだ如來のお慈悲のみ手をはなるゝこと出來ざるなり。

## 二九

我ら一切衆生を救攝する權威あるは、いかなる尊なりや。

しやか如來の教によつて見るに、一切諸佛ぼさつ諸天善神はかすもかぎりもなく在ませども、一切の衆生を救攝したまふ權威あるは、あみだ如來御一かたにてましませば、我は唯一心一向に、あみだ如來をたのみたてまつりて、うたがひなく、うらおもひなく、信念して御まかせ奉り、その外の諸佛ぼさつも諸天善神といふも、みなあみだ如來の御分身にてましませば、何れに對しても深く敬ひたてまつり、みな御一かたのみさかえを現はさん爲の御分身なれば、いかでかこれをうとんじたてまつることをうべけん。さればとて、別々に何さまとて御名をとなふるに及ばず、只其御本眞に對する觀念に住して、南無あみだ佛と申したてま

つる。其御本體を拜みたてまつる。まことのうやまいと申ことなり。

### 三〇

信仰の御すゝめまでに申述候。

信仰のようと申候ことは、自己の信仰心と、こちらの信心を攝受したまひて恩寵を與えたまふ客體の主尊との關係によりて、我らは無窮に救濟せらるゝことに相成候。されば天地萬物の中に、いかなる主尊がまことに活ける眞神にして、我らの靈魂をこの上もなき所に救攝したまふおかたかは、釋迦如來のみ教によりて承り候へば、あらゆる佛ぼさつ諸天善神の中にも、たゞあみだ如來ばかりが無量壽如來とて、終りなしにとこしえに在まし、無量光とて一切の萬類を悉く救ひとりたまふ威權まします主尊にましますと信じたてまつる。

あみだ如來と申奉るは、無始無終眞實の主尊にてましますせども、我ら一切衆生を無窮にたすけたまはんとて、方便法身とて、身を法藏ぼさつとて、人間に身を現じ、國王と生れ位いみじくましますせども、衆生の爲に世自在王如來のみもとにて無上道心を發し、一切の世界を

觀て、善と美との清淨國土を衆生の爲に現はす爲に、いかにせば、無明のやみにまよふ衆生を無上のさとり身となして、我と同じく無上佛果を得せしめんとて、五劫に思を盡し、無量永劫のかぎりなきながき間の苦行に骨を碎き身を苦しめ、苦界の衆生を救はんが爲には、  
(以下斷絶)

## 三一

若し彌陀如來が、いたらぬものは、すてゝしまふとしたならば、我々はいかゞして助かりませう。また左様なる御思召であらねば、みだ如來を親とあふぎて、すがる理はあらざるなり。いたらぬ子をいたらせるこそ親とたのむ甲斐あるなり。これに思ひ合せて、あなたに御ねがひが候。

此頃世間を見るに、しゆうと、しゆうとめの、よめに對する状態を察するに、年まだゆかざれば、もとよりいたるはづなきよめが、なすわざを見るに忍びずして、これを心のわづらいとして、種々心配せぬものは大方なき位なるべし。あなたの如き信心深き御身といへど

も、またこのうれいは、まぬかれませじ。

わかきものゝ、いたらぬを見て、にくしとおもふは、まだ、あみださまの御光明が眞に心にしみませぬのである。なすわざよからぬも、いたらぬを見てもあゝかわいそうなものではないか、かゝるものを、かわいそうとおもふ親の心となりて引あげてやらねば、どうしてそれが人間になれようと、○○○しひこそまことの親のめぐみなり。

古歌に、じひの目に、にくしとおもふものはなし、罪ある身こそなおあはれなりと。どうか御信心の至りたる彌陀の慈悲をうけて、罪ある身こそ、かわいそう。いたらぬものを助けて、いたるようにしてやり、いくじなきものや、にくきものこそ、なおふびんにおもふところの恩を施せば、其恩に感じてよくなつてきます。

私共のように罪あるものを、猶ふびんにおもふあみださまのおじひをおもひやりて、其したのものをめぐめとは佛の教にて、あなたが深き信仰のしるしとして、先づ、およめを、さいどしたまへ。いたらぬものを、ふびんとおもひしんせつにしんせつにして、ふびんにふびんとおもふて、あみださまの如く、子をおもふじひを以て、いたしますれば、必ずしたがふ

心に成ります。一旦子とはしたものの、いたらぬものなるが故に、一そずてるがよいとして若しまた大なる親より、また其報ひとして、じひのみ手より、はなれてしまへば、未來永劫いかになされます。

## 三三

宇宙は元來一なれども、科學的と哲學的と宗教的との三面の宇宙觀あることを御承知でありませう。

佛教の學者は哲學的と宗教的とを混交して觀て居る御方がござる。哲學的に眞如と云ふことを宗教的に法身といふ。哲學は宇宙の實在を理論の對象として其知識を得るを目的とす、故に理論的に抽象論となる。

宗教は自分が苦樂を感じる人間であるから、之が根本たる親としました救濟者としては、實在も人格的ならではならぬ。

眞如と法身は本一體なるも、甲は哲學的の名詞にて、乙は宗教的の表號である。法身を人

格的に観ることは已に法身と云ふ身と云ふは人格的に名づけたので、殊に加ふるに法身佛と云ふ。更に密家では法身を大日如來と仰いでおる。

### 三三

白に紅に七重八重に匂ふ梅が香や櫻の花も悉く

大みおやの御恵みと御力とによりて咲匂ふものと信知するときはおくゆかしく感ずると共に、大みおやの御恵みに對して感謝の念禁じ難く候。

大みおやの、天地萬物をもて我らを育み玉ふ。しからば我らが心靈を開きてみおやの聖意に契ふ人に爲さんが爲のおぼし召なると信する時は、我らは一心に念佛して、みおやの慈悲と智慧との光明を被ふりて父子相迎即ちおや子對面出來うるやうに（心靈を養ふやうに）御育てを被むり度候。

如來の在まさいる處なきが故にいつも現に此處に在ますことを信じて、聖名を稱えて、みむねにかなふやうに祈り奉らん。

さて先般昇堂の砌りは御心盡しの御饗應に預りまた御藥等の種々の御惠贈にあづかり何とも感謝に耐えず候。御蔭にて風邪も今日にては全快いたし、續きて夜分もおそくなりましたが、引越にはいつも夜行にのみ成候故しばらく邪氣も残り在りしが、もはや全治仕候。其砌申上置候願くば御地方の青年男女の爲に禮拜儀と讚歌を教え下され度候。小野原笹川様に御送附候内より御要ほど御ついでに御取寄せ相成候様願はしく候。笹川様には尙御入要ほどいくらにても御送附候間左様御承知下され度候。尙くさく申述度候へ共後便に譲り候。延引ながら御禮如斯御座候。

## 三四

肅復暑中御熱さ酷敷候折

如來歡喜光裡御全家益御多祥の段大慶奉存候。さて此頃熱さの酷敷につきても、おもへば難有感候。其故は

法身の大みおやさまが、私共すべての衆生の一ケ年の命をつぐべきいのちね即ち稻穂を能く

實らしめんが爲に、此熟を興へ玉ふとおもふ時、此あつさの強きほど、大みおやの御慈悲の深きと信する時は、いかに私ども如きわが儘ものにて、熱さをかこつことも出来申さず候。

此稻米をも御恵みにかゝりしおぼし召は、われらが命を養ふ爲めと思へば、尙更に私共は深く考へねばならぬことと存候。然らば私共の此形體を養ふて下さる聖意は何の爲ぞとたづぬれば、私共の心靈を完成せしめて、蓮臺に昇ることを得らるる身に爲さんが爲めと信する時は、私共は御恵みの光や○にて出来あがりたる米を毎日何萬粒づつ食ながら、只徒らに明し空しく暮して、此形體のわら計りをつくりて、來年の苗となすべき魂のみ○を充分に實らせずして畢りなば、何の面目あるぞとおもふ時に、然らば私共の心靈の果實はいかにせば充分に實のるべきぞとなれば、彼の秋の稻穂に結ぶ稻實は太陽の光を能く受くる故に能く果實を成熟する如くに、私共の心靈の果實は、如來大悲の光明を蒙りて成熟す。しからは大悲の光明はいかなる處を照益したもふとなれば、聖典に、如來の光明は遍ねく十方の世界を照せども念佛衆生のみ攝取して捨て玉はずと。私共の心靈は大悲の光明に攝せられて、稻實

の能く成熟する如くに、捨て玉はずして、彼常樂の邦の法性常樂の身と生るることを得るは、即ち捨てられざるなれ。果實の能く熟せぬのは來春の陽氣に遇ひながら發苗せぬ如くに、私共の靈は彼の國に生れる事叶はぬ。そが即ち自ら捨てられしことならめと存候。さて大悲の御親は本願成就の曉より、あなたを待ちわびて、大悲の尊容は眞正面にあなたにむかわせ給ふ。そはあなたが御慈悲の御名を呼び奉ればなり。されば聖善導尊者は、衆生口に佛をよび奉れば佛之を聞き玉ふ。

御佛の若し眞正面に在まさぬとすれば御名を呼び奉るは無意味のことにて候。身に敬禮すれば佛之を見玉ふ。

如來ましまさざるに敬禮するは無意義にて候。故に如來はあなたの眞正面に在ますと信じ玉へ。

ところに念すれば佛之を知り玉ふ。

如來は念佛衆生の眞向うに在ます故に衆生のおもふことを知り玉ふ。

衆生佛を憶念したてまつれば佛もまた衆生を憶念し玉ふ。

大なるみおやは小なる子どもらを愛念し玉ふ。相互の間がらが離れぬ故に親縁と名づく。私どもは大悲の御親を離れては信念の生命は發達すべきものにあらず。

實に頼みても頼み奉るべきは

大悲の御親。念々の稱名悉く御親と離れざる心行にて候。尙くさく申述度候へども後便に讓候。

### 三五

無量光の聖名を稱へて新年を祝し候。

語に一年の計は一月にありと。一月の元始より本年一ケ年を有爲に時間を使用すべきやう心かけ望ましく候。

現今すべてに亘りて改造の聲、盛んに聞へます。

改造の中、最も根本たるは、國民精神の改造にて候。世の人を見るに、人生の根底に横たはる、絶對大靈の光を知見せず、只だ心を外面にのみ注ぎて、また眞實の自己を自覺せざる

ものゝみなるは、全く吾人宗教家が道の爲めに忠實ならざる所のいたす處と、彌よく慚愧に耐へざる處なり。

子が今、學につとむる將來道に立ちて世に大光明を宣傳すべき自覺教人覺の準備に勤勉すべく是望ましく候。

## 三六

手を取りて共にすゝまむみひかりの

みねいかばかりたかくありとも

教祖釋尊は無上の道心を發して其志節の清きこと皓々たる月よりも清く、また無上の眞理を悟らんとの願望は朝日の昇るよりはさかんなりし。ついに大悟して宇宙の眞理を發顯なされた。佛の子たるものは志は釋尊のそれと同じやうになくはならぬ。いやすゝめよきよきみちを。

古人も煩惱の犬は追へども去らず。菩提の鹿は招けども來らずと。されども、いと敬愛するところの尊宿よ。煩惱卽菩提なれば、肉體が最も愛するところの或對象物に對する情の深ければ、それと同じく靈の對象たる宇宙間に二つとなき三つとなき釋迦尊もその他の十方諸佛もみなひきつけらるゝ

あみだほとけにひきつけられて、頭より爪先きまで、凡て全部を放げ込んで、此世より永遠にまで離れぬやうに成りたまはれよ。されども淨滿月のみすがたを瞻ながまんとすれば、ますます浮雲のためにさへらるゝことを歎くとの事なれども、されども群り來る雲も月の光に映ろひて、一しほまた月をかざりの因縁ともならぬ限りもあらざりしならめ。兎にも角にも群り來る雲の心は、月のそれとは異りて須臾の間こそは月を失はしむるやうなれども、しかしそれは永しへに在るものならざれば、かまへて尊き御名を通して、慈悲のみすがたに接するおもひをなす時は、いつかは煩惱も卽菩提の月と成る時は必ず來ることを信じて、一に彌陀

のお慈悲を仰ぎ給へよ。

六〇

### 三八

佛教に積極方面と消極方面とありて、消極面より見れば、現世界現人世はかく人間になど生れ出さればよいものを、そもく六道に迷ひ出したのが生死の苦を受けねばならぬ運命に陥ち入つたのである。故に是非此の迷から出でされば眞の永恒の生命に入ることとはできぬと。

積極の方より云はゞ、法身の大みおやより必然的に修行に出されたので、天にも地にも此の五體五根六識にも本より罪はない。大みおやの聖旨に隨はざるのが罪である。

無論現人の身心は完全ではない。されども報身の光明を被りて靈化せらる可き性能をもつてゐる。即ち佛の子として光明生活に入れらるべき可能性を有つてゐる。

人類は高等生物の故に宗教の要あり能あり。鑛物でも劣なる石は琢磨の要はない。人類已下の動物は宗教を以て脱却すべき要はない。人類は金剛石の如くに琢磨せざればならぬ性を

もつてゐる。是非とも報身の光明を被りて靈化せねばならぬ。それが即ち法身の大みおやより産み出されたる佛性の卵を、報身の慈悲と智慧の光明によりて靈化せらるべき性をもつてゐる。折角に人間と云ふ學校に選み入らされて、十二光の光明に依つて信心開發の生活に入つて、大みおやの子として此の學校を及第せねばならぬ。

現在の生活は日々の二三萬の米が生命を献げて我等に食と成つてくれるので、此の人間の肉と血となつて、大みおやの光明生活に入るべき身に成らん爲めに、米は犠牲と成つてゐる。若し日々二三萬の米の生命を己が血肉と爲して居つて、日々に餓鬼の精神生活を爲せば、食はれたる米まで餓鬼道に墮ちてしまふ。我が責任は重い。此重い責任はとても自分の力では擔はれぬ。無限の力ある大みおやの光明を仰ぐ外はない。

進めよ〜大みおやの光明を被りて、働けよ働けよ聖旨のまに〜。

### 三九

大みおやは、我は虚空遍滿の大身を以て永しへに可愛き子たる汝を見つゝある故に、汝も

亦最も親しみのあるオトーサマ、ナムアミダ佛と我を呼べよ。本とうに我は汝のオトーサマである故、慮なく我をオトーサマと呼べよ。我は汝が久遠劫來オヤの許を離れ光り輝きつゝある我前を背ろにして六道輪廻リオンの闇のちまたに彷徨さまようをいかばかりにか氣づかひに思ひつゝあることよ。子を思ふ親ほど親をおもひなばとは、肉の親子の間許りでなくて誠に／＼汝をおもふみおやの慈悲なることを念れよ。尊宿よ、いつも／＼夜も晝もまた行く時も寐る時もしばしも離るゝことなきみおやを、あなたは眞實にしたはしくおもひなさるか、まことにまことに懐かしくしたひなさるか。

## 空海上人の道詠とて

空海が心のうちに咲く花は 彌陀より外に知る人はなしと

子より眞實にみおやを知るやうになれば、本とうに此我等がこゝろはみおやより外に知る人はなし。此の程、此の道詠の彌陀より外に知る人はなしといふ意に就いて、一人の信仰の告白には、本とうに私共は自分勝手自分勝手のわろき心、朝から晩まで苦みどうし煩惱のために常に悩みどうしである。此のこゝろの悩みもだへは何人に語らうとも、只世の人はウハべにこそ

同情を寄せてくれるが、内心はア、又愚痴をこぼす男哉とおもふ。眞實に我身のなやみを我なやみとし、我悶を矢張り御自身のもだへとして、同情的に眞底まで知り給う御方は、ただ彌陀のみおやの外にはよもあらじ。十方三世の諸佛は智慧の光を以て我らが淺間敷さをこそ照見し給うならむも、全く同情の慈悲を以て知り給ふのは只一人のみおやばかりと思ふ。實にみおやならで此悶をあたゝかに融合して、悦びとかはらして下さる御方はなしとおもへば、いよゝ／＼慕はしくてと。

また一人の曰うには、子を持つて親の心を知るので、此坊が本とうにかはゆくて靜かに抱きて笑顔を見ると、世の中には是ほどまた可愛いものはなきことよ。矢張り大みおやもナムと云ふていただきつく私を可愛くおもうて下さる御慈悲は、此子に對する私のこゝろのやうなものにおはすらむ。さればこそミダより外にしる人はなし。世の中にたとい何萬の女が居やうとも、私の見るやうに此坊を可愛く見ゆる眼は私の外になからうと思ひます。三世諸佛の中にも、彌陀ほど此私のことを可愛くおもうて下さる御方はなからうと思ひますと。

また一人の解するのには、人間どうし義理や人情などゝ云ふことは禽獸には恐らく解する

とはできぬとおもふ。感情上の美などいふても彼等には分らぬとおもふ。其の如く私共の人間の子どもに生れて而も成長して人と成つたからこそ人間のすべての事も解せらるゝ。若し犬の子に生れて犬であつたならば人間の複雑な精神のことは解せられまい。その如く私共は人間の子であると共に佛の子である。だから人間の子として成長したばかりでは、人事上の事は解らうが、もつとく廣みのある深みのある而して微妙なる靈明なる佛の御精神に經驗し給ふことはわかりませぬ。恰も犬が人間のこゝろが解せぬやうに。そこで佛の子としての心の花が開くに随つて眞實に甚深微妙の眞理がわかり、廣いく大きいくみおやの心の海が眺めらるゝ。だから今此みおやに融合しまた知見せられてある此微妙の心の深みはみおやより外に知る人はない。みおやと共に眺めつゝある常樂我淨の園に眞善微妙の華の咲き匂ふこゝろの色は麗はしさと香ばしさは、みだならで誰か知り給ふものぞと。

維摩經に如來一音演說法、衆生隨類各得解と。道詠に對する人の感まちまちにしてまた味あり。

#### 四〇

黑白の鼠の爲に命の藤根を噛まれつゝあるを識らで暮す身のはかなき我が生れつき、眞に依頼するに足ると認むる此世界も實は永く我を此地上に留め置いて呉れぬ。今に此の地球より振り落されて陰府の中うらみ有に彷徨さまよふべき運命なる此身とおもへば、實にもろき運命を以て此世に出でたる我等にて候。只眞に永遠に頼むべきは、絶對永恒の阿彌陀如來を頼み奉りて此世及後生、哀愍覆護を仰ぐ外之なく候。

#### 四一

見佛と云ふことは二の意義あり候。

一には、念佛して如來の慈光を被りて眞に信念が生き來る時は、例へば小兒が生れた計りでは親の顔さへ見へぬが、乳に哺養せられて、からだが発育するに随つて次第に眼も發達する故に親の顔を見ゆるやうになる。實は小兒の全體が発達する故に眼も見ゆる如く、見佛と

云ふも、實は心靈の全生命が生れ出し其の兆候として、心眼の見佛と云ふのである。かへて云はゞ、活きた信仰になれ、如來の光明に依つて靈に活きよ、活きたしるしには佛を見奉らんとの意味にて候。

二には、先きに述べし如く、精神生活の上に、常に守本尊として人格的の如來現前し給ふ、との信仰は宗教上の最も宗とする所にて候。各寺の本堂に本尊を安置し奉る所以、また各檀家の佛壇に本尊を安置する所以の如く、人々の信仰の頭上に常に如來を安置し、各々活ける佛壇を空にせずして、自己の本尊の指導の下に日々の精神生活行爲を爲すを最も宗教の宗とする所なりとす。

斯の理を以て人格の本尊を確立する所以なりとす。

#### 四二

超然教即ち天臺に云ふ別教のは、三身各別の報身を本尊とす。別教は實は方便教にて圓教の彌陀は三身即一の報身にて是眞實教にて候。

淨土宗にても了、西二師の如きは、三身無碍の報身を以て淨土宗の彌陀とす。また宗祖の撰擇集に名號を本願とするに二義あり。一、勝の義、曰く名號に四智三身十力等一切内證外用攝在す云々。名號すでに三身具す。若し三身相離れて只報身のみならば名體萬德圓滿ならず。法身報身應身の聖名に歸命し奉るとは、即ち南無阿彌陀佛のこと、甲は義を以て乙は法を以て名體法中已に三身相即す。

圓教の三身即一の報身佛を本尊とす。一體三面の報身如來を表面とし本尊とする事にて候。殊に現在の萬物は法身の御恵み、心靈攝化は報身の御慈悲、教法を信知するは應身教祖の御力、斯く三身は如來の方より云はゞ一體にて、衆生の方より見れば、三身一を欠いでも私どもが身に靈に教に活ることはでき申さず候。

宗祖の名號萬德に三身具德をのべませるも、また中興の了、西、兩師の如く、淨教の立宗判教の爲めに彌陀の宗義の最勝なるを顯彰せん爲めに、書を著し説を立てたる爲めに淨宗の今日あるに至れり。

## 四三

如來は一切衆生の御親である。みおやを眞實にみおやと信するのが信仰に入る第一歩である。如來を眞實に御親と信する時自己は佛の子である。眞の佛子と自覺するのである。如來は御親にて自己が佛子と自覺する時は他のすべての人は悉く同胞である。すべての人が眞に同胞と信認する時はすべてに對しておのづから親切に成らざるを得ぬ。

## 四四

如來の光明法界に周徧せば如何なる形相あり又いかに認め得可べきか。曰く如來の光明は法界に周徧すれども見聞する事は出來ぬ。然れども實在することは否定できぬ。今例を以て明さん。例へば火大は法界に周徧すれども火性は目撃することはできぬ。火は薪炭の類に燃ゆる時は形相を以て見るべきも純粹の火性のみは認むることはできぬ。如來の光明もまた然り。實に無限性なものなれども人の心意に感じて初めてすがたに顯るゝなり。

#### 四五

宗教は、人の個體に自我なる中心有る如くに、宇宙にも中心獨尊の存在を認めて、之に個體の中心なる自我が、大なる宇宙の中心獨尊に歸命信賴して永恆の安心を得る所にあり。個體の中心が益向上するに随つて宇宙の中心の尊貴なることを認む。個體に靈性の尊貴なる性能が發揮せざれば宇宙の中心尊格を認むること能はず。故に宗教心を發達せしめんと欲せば、先づ現在の肉の我は動物的我にして、一心に宇宙の絶體的靈界の中心獨尊の威神無極最尊第一なるを信して、無上の尊敬を以て常に禮拜し至誠深心に絶待尊者を歸依し念ずること久しければ、漸次に靈性が發揮する故に、彌々大靈的尊格を信認して最尊く感ぜらるゝ宗教心が發達す。宗教心顯示せざるものは、宇宙の尊靈を認むるも、まだ尊崇性が發達せざる故に客體の尊格を感知する能はざるなり。例せば動物には高等なる靈性が全く發達せざる故に如何なるものに對しても尊敬心が感じられぬ。人類は知識其他の感情意志等が發達しても、尊崇性が發達せぬ者は、絶待尊格に對して尊敬の念が起らぬ。彼には高等なる宗教心が缺け

て居る故に動物的である。動物の頭脳には高尚なる宗教性が缺けて居る故に最尊靈者に對する尊敬の念はない。自己の尊崇性が高等に發達すればする程絶待尊に對して尊敬の念が深い。故に尊崇性の發達せるものは人格も最高等である。

#### 四六

太陽が平等に照すに此光を反映する鑛物中高等なる鑛物程太陽の光り能く反映す。塵澁なる鑛物は反射の度が少ない。鑛物の緻密なる性質のものほど反射の度が強い。金剛石水晶杯は日光が強く反射す。日光と性質が近き故である。宗教的尊崇性の強き人は寶石の如くに如來の日光が著しく反映す。古來宗教的偉人は金剛石の能く磨ける如くに靈性に彌陀の光明反映して釋尊の如く輝くなり。

#### 四七

靈性の金剛石は本來具有す其量に於いては大小あらん。金剛石靈性具有すれども之を琢磨

するに非されは其の靈性を發揮するに至らず。法然上人は常恒不斷に念佛して、彌陀の大靈と自己の靈性とが念々にすれつもつれつ、一心金剛の如くに堅固にして、如何なる事にも屈せず撓まず、念佛して彌陀に磨かれたる故に、信心の金剛石の靈性能く發揮して最高等なる宗教心が成就せり。故に法然上人の寶石には常に彌陀の光明が反射しつゝあり。例へば寶石に日光が反射する如くなり。法然上人の靈的偉大なる所以は彌陀の光明に反射せられたる處にあり。されば法然上人は肉體は人間なれども其心靈は即ち彌陀の光明に靈化せられたる分身の彌陀である。されば時の人が、形を見れば法然房實を申せば彌陀如來と、敬はれしも全く是れ彌陀の光明に映じたる法然上人故である。若し法然上人の頭腦より彌陀の光明を全く除き去らば残る所は只人間の法然上人のみ。靈界の偉人としての法然上人は全く彌陀に充滿せる人格のみ。かくの如く人格の光輝を放つは常恒不斷に念佛して彌陀の光明に磨かれたる結果に外ならず。

人々皆悉く佛性あり。一心に念佛して金剛の靈性磨く時は彌陀の光明反映して法然上人の如くにならん。たとへ材の大小はありと雖、念佛して能く磨く時は必ず彌陀の日光反映せん

## 四八

此の頃の蟬の鳴く聲を聞くにつけても自づと思ひ出づるは法然上人の

あみだぶと心は西に空蟬の もぬけ果てたる聲ぞ涼しき

の道詠にて、何とも懐しく感ぜらる。彼の蟬はもぬけ骸よりぬけ出でて、中實はいかにもきよく潔よく聲を涼やかに歌うて居る。私共も一心に念佛する時は、此身はむくろの夫と同じやうに成りて心は彌陀尊の中にぬけ出で、我を離れてあみだが我か我があみだかとまでに成りて稱ふる時は、心はいかに涼やかに其心のいかにもすが／＼しさが自づと聲にあらはれてすゞしき音すなり。それとも鬼にかく口には御名を唱ても心はよそ事にのみ構ひてあらば、それは中味のなきむくろにて、否たゞむくろのみにあらでくさん／＼の雜念妄想のみに耽りて居たらば唯だ口を費すのみ。されば聖法然上人が念佛してミダに深くほれ／＼と想ひ込みたる心の内こそゆかしけれ。實に其のあみだ佛に心を遷したる上人の心は宛がらみだに異

らず。されば時の人々が形を見れば法然房實はあみだ如來とひとへに歎美したるも理りなり。

彌陀尊は光明普ねく平等に照り渡りてまします。こなたが其光明に接せんが爲にミダ尊に眞正面になりて心をミダ尊に致す時は、アナタの光明はこなたの頭上より全身に入り來りて、こなたの心がいつしかアナタの心と同じやうに化しぬるを疑ふことなかれ。

世には眞のみおやの聖名をだに知らで空しく人生を闇の中に葬り去る人こそは實に憐れにこそ。併し乍らかかる人とても同胞たることは異らず。願くは世のみおやを離れたる同胞の爲めに一掬の涙を注ぎてみおやの聖意を御知らせ申さばや。また世に日々幾千萬遍となく稱名し乍らも心には毫もみおやを慕はしくもまた懐しくも思はで稱名は唯だ死後の冥福をいのる呪文のやうな族も少からぬ。同じく同情に耐へぬ。

南無あみだ佛と御名よぶ眞正面に彌陀世尊は現に在ますなり。若し彌陀世尊はましまさぬに御名を呼び奉るは無意義の事にて、實に彌陀世尊なる絶待人格在ます信念によりてこそ始めて活ける信仰とはなるなり。

心本尊と申すことは吾等が心中に何時も離るゝことなき尊き活ける本尊をおすゑ申置く事なり。例へば大殿の中臺に御尊像を安置する如くに、私共の頭の中臺に彌陀尊を安置して、常に御本尊の威神と慈悲の光明に照され、邪と惡とを捨て正と善とに就く御みちびきにあづかることなり。我らが心本尊とは吾らが面前に如來は萬徳圓滿なる絶待人格として眞正面に在まして圓かに照し給ふ事なり。此信念の前にはいかに我らが如き淺ましき者も自づと清く高く靈に有り難き心と成る。威神の光明赫々として我らが頭上を照し給ふを想奉れば自づと私共は歸命頂禮の心が起きて何とも尊く感ずるなり。また彌陀尊の慈悲に充しめ給ふ御すがたを想ひ奉れば何とも云はれぬ御懐しさとかたじけなさを感じざるを得ぬ。

## 四九

禪の公案に隻手の音を聞と云ふあり。禪は形式的の悟道なれば、自己の先天的の自性を開き即ち無聲の音を聞くに無聲の聲を以て自性を見るの手段とす。禪には宗教的客體の神を立てず。自己の本來の自性顯れ來る處に見性成佛す。今念佛門には、其れと反對に、我等が信

仰の客體に阿彌陀佛を本尊として之に歸命信順して、其双方の間に最も完全なる親密なる關係、即ち兩方の合致した處に初めて宗教心が成り立つ。衆生心水淨む時は佛日の影中に宿る。月は天に照して影水に映ず。月如何に皎々たるも水無き時は影を現はし難く、また水は滿つるも月なければ反映せず。衆生の信心と如來の恩寵の和合する處に感應道交し、此双方の關係は實に親密なるを要す。

如來の大慈悲心と衆生心の和合する處に感應道交初めて眞の宗教は成立つ。而して此双方の關係は恰も兩手の相びようしの處に拍手の音は聞ゆる如し。故に自心が彌陀に合して感應道交の妙音を聞くことを得て始めて眞實の信仰は得たるものとす。唯だ此の感應道交を言語の上へのみ會する如きはいまだ眞の拍手の音を聞くと云ふに足らず。須らく三昧發得して眞の拍手の妙音を確と聞き、また彌陀の答を聞くべし。

## 五〇

我等はみおやの子たると共に人の子である。人の子たる我等には染汚と迷妄と罪惡と苦惱

との皮殻が強く／＼結び付いて居る。是が爲めにややもすれば自己を暗黒に引込まれて悪道に陥れんとして居る。佛子としての聖き心は微にして却々顯れ難い。みおやの恩寵を被り光明に變化せられて疾く光明の下に生活し得るように、専らみおやの恩寵を仰ぎ慈光に導かれん事を期すべきである。

## 五一

此の頃の熱さいかに感じなされ候や。私ども衆生が一ケ年のいのちをつなぐべき、いのちのね（稻）を養うて能き稔をなさんとの準備としての、あつき御恵みの熱さに候。之の熱さがつよきは強きほど、大みおやの御慈悲の深きにこそ。若しも此の熱さがなければ私ども命をつなぐ稻の豊稔は得て望むべからず候。されば熱さのつよきを有りがたく感ぜられ申候。

念佛三昧爲<sub>レ</sub>宗。宇宙の主なる彌陀と三昧交感又は光明獲得を宗とす。

往生淨土爲<sub>レ</sub>趣。光明の生に復活又は更生。現在は理想的涅槃（光明生活）未來は實在的涅槃。

宗。宇宙絶待の主なる如來、衆生思想中に靈應身を以て交感す。斯の靈感即ち宗教的生命なり。如來の靈應常に衆生の心殿に在して中心本尊として指導し給ふ。

趣。已に復活して靈的生活として光明中にありて如來照鑑の下に活ける如來を本尊として一切の時一切の所に於いて其神聖なる統治の下に靈き生命として事へ奉つる。

大宇宙の中心最高なる法界宮に在して眞善美妙を以て莊嚴せる如來は衆生の機感に應じて衆生の信心想中に映現して其の心宮に靈應身を降臨し給ふ。是れ宗教的中心の本尊なり。

此時に従來の我は降服して如來の法子として聖き生命に更生したるものなり。靈應の指導の下に光明生活の向上の一路の光明大道。

宇宙の最高至尊の在す華藏世界に向つて其の如來照鑑の下に往邁進趣す。之れ現在に理想的に光明中の法子の進む大道なり。

彌々命終つて正しく涅槃なる華藏界に實在的に生れて文殊普賢の行願を學ぶべきものなり。

## 五三

宗祖大師の、

あみだ佛に染むる心のいろにいでは 秋の梢のたぐひならまし

との御詠の如くに、自分の心が如來の聖意に染んで見れば、己が心そのものが即ち如來の聖心と同じ様な色に成つたのであるから、世界萬物も悉く如來化して見ゆるに違ひない。青眼鏡を以て外界を見れば、萬物皆青色に爲る。犬の眼では世界悉く犬の世界である。人間からは人間の世界としか見へぬ。佛と成つてからは世界も悉く淨佛國土である。

然らば我らも己が業識をすて、如來の淨心に淨化せられて見れば、世界として淨界なら

ざるはない。

印度のタゴールがこう云ふて居る。此世界の萬物は悉く神の悦びから現はれたのであるから、萬物は一として喜を現はして居らぬものはないと云ふ。意を借りて、私共が光明主義の信仰から見れば、世界萬物の中に、一として如來の清淨歡喜智慧不斷の光明の勢力の加はらぬものはない。先づ朝起きて太陽が東の方から昇る光景を見ても知らるる。朝の天はいかにも清らかに涼しい風も天地のすべてが清淨光に浴せられて居る。朝は涼き天の色も氣も悉く清淨光に滌がれて居らぬ物はない。それから太陽の清き大海の水で顔を洗ひながら清き水の中から、いかにも清らかな顔を地平線から出初めたのを見れば、何人にも清淨光を聯想せらるゝでせう。而して太陽の赫々たる光圓かなる水面には滿面の歡を堪えて居る。誰か此麗しき歡の水面を拜みて歡喜せず居られやう。

すると太陽が出ると世界萬物ははつきりとわかつて来る。是智慧光の物質現では有りませぬか。太陽の赫々たる勢力から常恒不斷に力を萬物に及ぼして居るは不斷光の一分とより外想はれぬ。

年々新らしく清らかな新緑の芽出づるも、新たに云ふも清らかと云ふも同じ意味なので、清らかな新たに出づる新緑は日本中の野にも山にも里にも庭にも何れの處も清らかに新らしくなつて、清淨光に浴させられて居る。新緑は本とうにうれしさうな芽から歡喜を含んで出て来る。櫻の梢にも清らかに朝日に匂ふ色がいかに嬉しさうに、又不斷の勢力を以て其の本務をつとめて居る。一切萬物の中に光明主義家の眼には、清淨光と歡喜光と智慧光と不斷光との勢力の含まざるものはない。

## 五四

吹き荒む無常の嵐の残酷なる、貴賤を問はず老若を論せず、之に觸るゝは紅顔も忽ち變じ英雄も力を失ひ、此風の前には王公もなく賢聖もなし。古往今來此禍を免るゝもの有ることなし。さればこそ應身攝化の牟尼世尊も娑羅双樹の下に光顔の花散り赤梅檀の煙に〇八の相きえぬ。

歴山大王の軍向ふ所敵なく到る所風靡せざるなきも無常の風の前には孤燈のごとくに消え

はてぬ。

聖きによりて愛する所の貞道尼のきみよ。酷なる無常の風は尼のきみがたよる所の此所に彼所に燈火を吹消して尼のきみをして暗憺として悲ましむ。誰かきみの爲に同情の涙を惜むべきぞ。殊にかよはき女性の身の上、豈恕やらで止むことを得むや。是に對して同情の感なきものは人類にあらず之を耳にして悲を共にせざるものは畜類に等しきなり。

さればぞ貞道尼のきみよ。牟尼世尊世に出玉ひて斯かる無明の闇を照さん爲に一道の光を與へこの苦惱を救はんか爲に慈悲の福音を傳へ玉へり。

若し世に無常なかりせばたれか浄土の常樂をねがふべき。世に哀別の苦なかりせばいかでかかの無爲の常樂を求むべきぞ。

教主釋尊降誕し玉へるや七日にして生母摩耶聖后に別れ玉ふ。さればこそ世の無常を觀して一切衆生の爲に常住の眞門を開き玉へり。

尼のきみよ。たとひ身を改め衣は替えたればとて心を更へ志をかゆることは難し。また耳に佛法は多く聞けばとて心に佛法を得ることは難し。言には無常を觀せよと言ふも精神に無

常を悟ること稀なり。常住の眞理をもとめんと言ふとも全く常住の眞理を證することは容易にあらず。

きみが爲に眞に無常を觀せよと教玉ひしものはたれぞ。即ち養育の恩深かりし悲母其人にあらずや。きみが爲に老少不定の眞理を具體的に示し玉ひしものは何人ぞ。姪なる尼稱因(子)にましまさずや。

亡き母きみの無常を教へ玉ひしはきみに常住の無量壽に信賴すべきを示さんが爲め。姪きみの老少不定を告げ玉ひしは不老不病の眞心を求めよとの勧めにあらずや。生母にあらずしてたれか此の慈誨を垂れん。姪にあらずしていかでか此の忠告を致さん。

母きみにをかれても又姪きみにても其うけたる報命は定れり。しかれども今即ち尼のきみが最修行に大事なる時機にして而も此活教訓に預りしは不幸のごとくにして實は幸福なり。若し今日より十年前に此境遇に値ふともいずくんぞ今日にして此訓誨を蒙る如くならん。尼のきみが身心ともに熟せざればなり。

尼のきみよ。此肉眼にてすでに眼前に此無常を實驗せり。尙進んで心眼を開きて觀ぜよ。

大慈悲に在ます大なるみおやなる如來は不老不死常樂我淨の淨土の門を開きてきみを待ちわび玉ひしにあらずや。此肉身死して後に初めて常樂の門開くものと謂ふことなかれ。きみが信心の眼開く時は現在即常住の光明界なり。常樂の光明界に在りて自ら無明の闇に迷ふ。一心念佛して三昧の眞門を開き玉へ。三昧門開くる所即常住の光明界なり。

觀經に曰く、あみた佛去此不遠、淨業成ずるものは見ることを得ん。

尼のきみよ。疾く如來常樂の光明を發見して、曾て無常を示し玉へる亡母きみの恩に報ひよ。はやく無量壽中の人と爲りて不定を告げ玉ひし姪の君に謝せよ。

さてあまり多言を費す時はかへつて尼のきみか爲に光明名號を稱念するの光明の時間を費すの憂なきにあらず。次に問題を轉じてしばらく報答せん。

御書面に日々夜々勤行また回向にも御兩人の冥福の爲にと手向けてもまだまだ物不足の感ありと云々。また我眞心はなき人の靈に届きてや云々と。

之が答辨につきては能く諦聽せられんことを希ふ。

きみが一心に念佛して如來を念する時は、其心状態はいかゞ。全く如來光明中の觀あり

や。慈悲光の感ありや。きみが心念全く如來光明中に在りて先亡の靈を招くとき、其靈もまた光明中に逍遙するの觀あらん。また慈悲に歡喜の感あらば、靈もまたきみに伴ふて歡喜の感あらん。誘ふ人自ら光明をよ（そ）に、世に誘はるゝものいかでか光明を得べけんや。彌陀身心遍法界また光明遍照十方世界、だゞ念する衆生の信念に應じて受と不受とあらん。自ら光明中の人となりて亡者を招け。自ら慈悲の妙味を感じてなき人を待て。自ら味ふて滋味ならば客もまた甘きをうけん。

きみが常に行住坐臥光明中たらば招かるる者もまた光明裡の人たらん。  
自らが見て明るきランプならば客もまた明を感じせん。

次に只々平素悲しみに陥り云々と。

そは實にもつともであるけれども、そはまだ犠牲的の忠告がきみに領解できぬから。また常樂に攝受せんとの大みおやの慈悲のみ手に信念の手がとどきかねるから。

今一つ一心の（底）の心で忠言を領解し、尙信念の手をのばして欲しい。

（註一）こゝに（一）上から下向きに五指をのばした手、（二）下から上向きにさしのばしてまだ上の手にと

どかぬ手。(三)その下の手首をにぎつてさし出させてゐる手の三が巻紙に書かれてゐる。

今夜は兩三名の志ふかきひとの爲に祈禱文を解説し畢つて歸りけり。それから筆をとりはじめて、亂筆ではあるけれども、きみを思ふ心は切であるよ。書き畢つて岐阜の山の夜半、

鐘聲をきゝて

ナムアマミタ佛

## 五五

聖なる光によつてきよめられたるいと親愛すべき羽生しげ子嬢よ。此ほどは我愛友なる嬢と聖き道の話をしたせし日はいかにうれしかりしぞ。實に悦ばしきにたえざるは、嬢が賢くも世の光なる眞理の道を好みなさるることども知り得たるにぞ。松戸の里に此の嬢あるはいかにめでたきことぞ。我は松戸の里に於て眞理の光明を求むる嬢の如き女子を發見せんとは夢にだも曾ておもはざりき。こゝに活ける寶石を拾ひ得ることは實にはからざりき。

ア、〇〇〇〇〇〇目出度や松戸の里よ、汝は能くも眞理の光を愛するこの嬢を産出せり。尙

中山君よりくさ／＼の話の次で嬢のことに及ぶ。君もまた深く嬢が眞理を愛するのみにあらず、賢くて能く理に通じ明晰なる腦を有せることに深く感ぜざるを得ずとの言を聞くや、益々たのもしくぞ思ひたりき。松戸の里に於て已に寶石を發見せり金銀珠玉何ぞあらんやあゝ頼母敷哉該町。

さてしげ子嬢よ。凡そ佛道を修し眞理の光を獲得せんと欲するに二面あり。蓋、人の精神に理性と感性との二性存すればなり。此兩性に於て全き修養を得て始めて完全なる光明を得たる菩薩と名つくべし。理性に光を得るは眞理をさとの心のはたらき即ち知慧なり。此知慧を研きてこそ始めてさとりを得るものなり。然して此知慧に學術上の知識ありまた實致修養の結果として發悟し得る大悟の智慧とあり。學解の知は眞智を得んが爲の手段として價値あるも眞實さとりの智慧は自ら眞理を照見することを得るものなり。淺深相同しからず。眞實の智慧は念佛三昧また禪定によりて發するものなり。此智慧の光を得るときは譬へば日中太陽の光明中に眼を開きて萬境を見るが如し。智慧の眼を開きて一切の眞理を照すことを得べし。

次に感情の信仰とは、吾人が斯く此小なる地球に生息するは絶對的偉大なる如來の不可思議力によるもの、如來の力と智慧とによらざれば一日として生存することを得るものにあらず。故に此大なる如來の恩恵に對してありがたく感謝せざるべからず。また吾人は如來の大慈悲願力によりて生死の苦海より救濟せられて、如來大光明のなかに無限常樂安穩を與えらるゝことを得るはげにみおやの大なるみめぐみなれば、深く其大恩恵に對して辱く報謝の念禁じかたきに至るべし。さてさとの光にて眞理を知るは理性の方にして、ありがたさかたじけなさうれしさ樂しさまた喜ばしさ等の感情上に感ずるのは感情の信仰なり。

宗教上にさとの光なきは、いかに有がたく喜ばしく感ずるとも、あたゝかにして、光なきなり。またいかにさとの光ありて眞理を得るとも歡喜妙樂かたじけなさ等の感情上の妙味なかりせば、寒夜の月の如く光のみありてあたゝかなることなきなり。

禪の悟道はさとの光を得る修道にして眞宗やキリスト教の信仰は感情のありかたさを獲るの信仰なり。

此兩性を兼ねたるは吾人の信仰なり。

理性と感情とによりて全き光をうるときは宛も太陽の光明に光線と熱線とあるがごとし。

如來の智慧と慈悲との光明によりて靈化せられたる心は理性と感情と共に光明をえて、ぼさつの徳を與えらるゝものなり。

羽生しげ子きみよ。ます／＼如來光明によりて智慧と慈悲との兩性を靈化せられて完全なる信仰を以て世の光たらんことを切に望む所なり。

さて文中御わかりかねし所も多からんなれども何れ來春御面晤を期してくはしく申上べく候。巡回中多忙、文も顛倒して居る所あらん。願くは中山君にも宜敷御傳へあらんことを。

## 五六

いと尊きみひかりのなか

ミオヤの如來の大なる御めぐみを感謝したてまつる。

あなたがたと同じくわたくしも

如來の明けき光と新しき糧と清き空氣とによりて今日のいのちを養ひ下さるは、これ全くた

と肉體の爲ばかりでなく心靈を養ふて、盡未來際無窮にすくはんが爲のふかき如來の思召と  
かたじけなく存して、たゞうか／＼と目をくらし夜を明かしてはならぬとおもひ、

如來の御すくひ下さる深き御慈悲を心にかけてわすれぬために、尊き御名をとなへありがた  
き日をくらすことに、願くはもろとも、いたしたうござります。

其後は御無音のみにうちすごし、こゝろにはいつもかゝりて居りますけれども、いつしか、  
いろ／＼申上たきこと多しといへども御面晤をたのしみその上に申上げます。來月はあなた  
方に御目にかゝることを、如來さまは御はからい下さることゝ存じ候。まことに亂筆にて失  
禮ながらあら／＼かしく。

## 五七

われらがぼんのうのほのほは聖きみめぐみによりてすゞしかるべし。

われらがこゝろのけがれは聖<sup>み</sup>むねによりてきよめらるべし。

前略、過日の御好意を感謝し尙御全家の幸福をいのる。

つねに御名をとなへて聖旨に沐せよ。

たえずみめぐみを憶念して御慈悲に浴せよ。

やすらかにしてまたいさぎよからん。

五八

至心に深く信す

如來は生命のみおや

心靈のみおや

教のみおや

なりと信し奉る。

如來は無限の力と恵とを以て我を攝取し玉ふが故に我もまた歸命信順し奉る。

至心に深く愛す

如來無上の恩寵をもて衆生を愛育し玉ふが故に我もまたふかく愛慕し奉る。

至心に欲望す

眞善美の聖國に生れて主の世つぎたらんことをふかく欲望し奉る。

### 五九

如來光明裡に新年を迎へ無量壽の靈號を稱へて壽ほぎ奉り候。兼ねて岐阜本誓寺に於て御依頼に應じたる釋尊三聖々影大に延引に相成候。此程本所にて依頼の分を引こもりて認めたよوناことにて候。御送附候間御落手被下度候。

おもへば我國民も久敷眠りたりし靈性も今は覺醒せざればならぬ機運に向ひ來りしやに感ぜられ、我々相互に手を携へて光明の宣傳に盡さざるを得ぬ(春)に相成しことの悦ばしく存候。

### 六〇

欽啓、過日來の御好意を感謝候。小子追々延引候て本月中に三州へ出張候。御地へも都合

して出張いたし度候。

雲はれてさやかに照らす月かけをきよき光といまは見なさん。

## 六一

欽喜光裡に新年を迎へ

無量壽の聖名をたゞえて祝し奉り候。

飯田家の御光榮あらんことを祈候。さて此程は御心に懸けさせられて種々の御心盡しの贈物にあづかり有がたく存上候。殊に手袋は朝のおつとめの折木魚を叩きて稱名するのに寒さを覺えず實にありがたく御禮申上候。さて本年の寒中は例年に比べて餘程緩くは候へ共夫れども寒中なれば寒く候。殊に貴地は寒さも嚴敷き事なれば定めて御寒き事と存候。御自愛是祈候。本年四月は御地に參上候事を今より樂み居候。

願くは此寒さの中も

大みおやさまのあたゝかなる御慈悲の懐のなかなる事をおもひて有がたく感じ候へば、外の

寒きにも内心にあたくさを感じ申べく候。

御慈悲深きみおやさまは朝日のかどやく如くに置はしき御面に笑をふくみて、可愛きみ子であるあなたをうちながめ玉ひて、あなたのなむあみだ佛と唱ふる聲を聞き召候。親を忘れぬ頼母敷子よといかに御悦びて居ますやと存候。

光明かくやくと輝く朝日を大みおやの慈悲の面かげと思ふて一心に念佛する時は、何とも云はれぬ辱けなさを感じ申候。同じ稱名を稱ふるにも、しみぐとみおやの御慈悲をおもひ、おやさまを心から御したひ申して悦びにしらすしらすも稱名が湧出る如きはことに有がたく候。

尙くさく申述度候へ共後便に讓候。

## 六二

御玉章を披見仕りますく御信仰のいやすすませ玉ふことを承り嬉しききはみに存候。

寔に惟れば、月日の過ぎゆくこといと疾くしてもはやことしのあつさも去りゆきて物さび

しき秋の初めとなり候。すべては夢まぼろしのしばしの程、只々

大みおやの光明の中に永遠の生命を求め、常樂我淨とて、ときはかきはに咲き匂ふ樂き園に自由の天地なる御國はあらゆる莊嚴を極めて、みおやの大慈まぢわび玉ふことを思ひ、こゝもまた大悲光明のなかなることをおもへばまた有り難く候。

一りの大みおやをいたゞく懐かしき上諏訪のきよき同胞をおもふときたのもしさかぎりなく候。

こゝかしこ百重の雲と幾重の山はへたつとも心は同じ光明のなかに同じくみ名を唱へつゝ暮しあることをおもへば、いかによろこばしきことに候。

さて此程高橋猪久治君より御傳へに被成候物確かに承申候。また報謝としての御金も正に受納候。度々御信施をいたゞき、學校また教會傳道の資に備へ申候。御芳志のほど感謝候。尙くざゞ申上度候へ共後便に譲り申候。

六三

歡喜光裡に新年を迎へ

無量壽の聖名を稱えて祝し奉り候。時下嚴寒の候益御機嫌よく被爲在候條大慶此事に候。

さて願れば

大みおやのおぼしめしを蒙りて上諏訪のきよき同胞衆に契り結びける思出多き年も送りて新らしき年を迎へければ改まりて彌々光明のなかにすゝみ向上せんことをこそねがはしく候。

(以下要事略)

六四

大みおやさまの御引合せによりて上諏訪のきよき同胞衆に此世後世大みおやの光明中に手を携えてすゝむことを得るちぎりを結びしことは實に嬉しく存候。願くはあなたとまた飯田さま小口さんと共に上諏訪の婦人衆を引立てゝ現在より未來永遠の光明にすゝむべきやうに

御盡悴のほどを望ましく候。

太陽の光によりて此頃の稻の果實のみのるやうに、如來光明によりてますます信念のみのりなざるやうにねがはしう存候。(以下略)

## 六五

如來無礙光裡に生息しつゝある御互の幸を賀し、みおやに感謝し上る。さて過般はながらくの間御せはさまにあづかり萬謝候。また出立の砌はわざ／＼お送にあづかり、みおやのやどらるゝ所、ぼさつがたの愛顧により乗車し翌日八時頃までに品川に着し、曾て約束したる佛畫を拜寫せざるを得ざるために着手し直に出來て是より下總の寺に歸り候。

## 六六

過日かはさきにて差出したる葉書着し候哉。其際、みよしゆき延引のよし申上候へども病氣は格別の事にもあらず、是如來さまが、みよしの方をも、ついでにせよとの思召しならん

と存じ候へば、廿六日行くことにいたし候。(中略)

徳本行者 (註一圓相の中に)

みなひとは十方衆生の願なれば (註一ひとは)

なむあみだ佛のまるのうちなり

## 六七

聖名によりて、聖旨のあらはれんことをいのり、みめぐみによりて、いかなるばあいにもうるはしきいろを變ぜざることをかひ奉る。

徳本行者 (註一圓相の中に)

みなひとよ (註一ひとよ) 十方衆生の願なれば

なむあみだ佛のまるのうちなり

如來の靈やどりたまふひとは、すなはち、いけるくわんぜをんぼさつなり。

いけるくわんのんとなりて活動せられんことをこそぞましけれ。

彌生の暖和なる氣に笑ふ花見ても 大みおやのふかき御恵みのほど感じられ候。先般福間へは小包御送附下され取り紛れて御禮申上ざるは慚謝候。また良き墨を御惠送下され難有御禮申上候。

其のうちはいかが御暮しなされ候や。娑婆の憂き世の風の身にしみ、なるれば、さばかりにいやとも感じられぬものと存じ候。殊に 大みおやの天地にみたしめ給ふ御慈しみのほどをおもほへば今さらに難有こそ。當地に於て到る所に役場員學校教員衆がしきりに求道のかたのます／＼増加するはまことに悦しきことに存じ候。

ひとへに大みおやの聖旨を拜して感謝候。

さて今たび兼ねて御話申上候信州松代の海沼教隨老尼が鹿兒島の不斷光院の特請により二月中旬に來九、歸途當地方に於て請待者澤山有之今尙結縁致し居候、就ては歸途御庵室に立寄候けち縁いかゞと存じ候につき御道尼に申置候間何れ御伺申上べく候間、御承知被下度候。

## 六九

御書翰拜見候。承るに豫て廣告したる畫會の内へ愚納のを出さるゝ事につきては實に申譯なき事には候へども、そのかわり觀音の聖影を認めて御寄贈申候事は御斷り申したのでは有ませぬ。只畫會として出し申事にては既往に於ても今回に於てもまた將來に於ても出來難き事と申上げたのであります。其かわりそれとは別として十枚は觀音聖容を揮毫いたして御寄贈候間左様御承知被下度候。書は何れ廿日頃迄に御送附候間左様御承知被下度候。傳道の都合上是よりは當學寮に住居することにいたし候。

大分に有識者の中に求道者も續出する様に相成候。

願くば婦人會も可成的眞面目に而して全く女子の品性を高く造るように精神的に實質的によき女子を造るようになし度候。

只今の分では知識は從來に比較して進みたれども、人格を形成する根本的要素を養ふ道な

き爲に人生本來の目的だも決定せずして、人間らしく天地の間に生存せざる比々皆然りと云ふ如きに至つては、日本國民の指導いかにも幼稚に候。

昨日大學生の一人云はれ候に、日本國民は人生の目的をいかの目的のために教育されつゝ有やの問題に至つて實にまた盲目時代にて候と云はれしを實に尤と存候。さては申譯かたぐゝ如斯御座候。和南

## 七〇

欽復、今日兼ての古稀の賀の觀音御送附候間御笑納の程。

おもふまゝに筆に任して書いて見た所が何だか自身の顔ににたやうになつて仕まふた故に題の方に、あなたの御意になつて同感として〇置ました。

二十五菩薩の來迎曼陀羅を、

光明中歡喜踴躍の聖相として。

先日の十二幅のこと、三尺幅六尺五寸にして五幅にしたならばよかろうと存候。それは丁

度此頃(註―明治四十四年)佛畫師が愚納に手傳して居るから、二十五菩薩を愚納すじ書と御面相を認めてすべて佛畫師に手傳はせることにします。

七一

こゝかしこ身はへだつともちぎりてし　こゝろは經きやうの園にあそばん

經をよむ聲に心もさそはれて　たのしき園にめぐりあそばむ

經の糸を心の玉につらぬきし　み國の友は戀しかりけり

子をおもふ親の心をしれかしと　經のたよりにきくがうれしき

ながき夜のねむりもやがてさめぬべし　あかつきことによむ經の音に

極樂ははるけきほどゝおもふらむ　日に幾たびもめぐりながらも

かざりたてゝたれをまつとやおもふらむ　親のこゝろを子はしらすして